

夢殿

北原白秋

青空文庫

上卷

白
良

昭和九年八月中旬、台湾巡歴の帰途、神戸に迎へたる妻子と共に紀州白良温泉に遊ぶ。滞在数日。

白良

白良の浜に遊びて

白良の ましららの浜、まことしろきかも。驚くと、我が見ると、まことしろきかも。踏
 みさくみ、手ぐさとり、あなあはれ、まことしろきかも。子らと来て、足投げて、膝くみ
 て、ただにしろきかも。白良の ましららの浜、松が根も、渚べも、日おもても、ただに
 しろきかも。あなあはれ、目に霧^きりて、火氣^{ほけ}だちて、しろきかもや、しろきかもや、立ち
 ても居ても。

おなじく

ましららの白良の浜はまことしろきかも敷きなべて真砂も玉もまことしろきかも 旋頭歌
 一首

また

ましらのまこと白浜照る玉のかがよふ玉の踏み処知らなく

まことにもしろき浜びや足つけて踏みさくみ熱き真砂照る玉

音絶えてかがよふ砂浜ましろくぞ白良のま玉火氣澄みつつ

昼渚

松が枝の疎き鱗に照るさへや真砂は暑し吹きあげの玉

女童の脛の柔毛につく砂のしろき真砂は光りつつあり

浜木綿^{はまゆふ}は花のかむりの立ち枯れてそこらただ暑し日ざかりの砂

浜木綿を、また

牟婁^{むろ}と言へば葉叢^{はむら}高茎^{たかぐき}百重^{ももへ}なす浜木綿の花はうべやこの花

紀の海牟婁の渚に群れ生ふる浜木綿の花過ぎにけるかも

糸しだり花過ぎ方の浜木綿は影おだしけれ火照^{ほで}る夕波

崎の湯二趣

崎^{さき}の湯^ゆは湯室^{ゆむろ}の庇^{よつ}四端^{まつ}反り夕風にあるか入江向ひに

牟婁の崎荒き石湯^{いはゆ}に女童^{めろ}居りて大わだの西日ただに明^{あか}かり

夜景

浜木綿に湯室ゆむろの灯映あかりうつゐて真砂踏み来る足音絶えぬ

短夜

短夜の白良の浜に來寄きよる波燈籠にまくわ苧をがらなどをあはれ

白良莊起臥

朝ながめ夕ありきして牟婁の津や白良の浜に玉をめでつつ

玉ひろふ子らと交らひ牟婁の崎白良の浜に七夜ななよ寝にける

砂いくつ畳にひろふ起おきふし臥ふしも早やすずしかり唐紙たうしのべしむ

鄉土飛翔吟

小序

我弱冠、郷関を出て処女詩集「邪宗門」を公にして以来、絶えて故国に帰るこ
と無し。その間、歲月空しく流れて既に二十の星霜を経たり。時に望郷の念禁
じ難く、徒に雲に島影を羨むのみ。偶 昭和三年夏七月、大阪朝日新聞社の求
むるところにより、その旅客輸送機ドルニエ・メルクールに乗じて北九州太刀
洗より大阪へ飛翔せんとす。これ日本に於ける最初の芸術飛行なり。事前、乃
ち妻子を伴ひて郷国に下る。山河草木、旧のごとくにして人また変転、哀樂ま
た新にして恩愛一のごとし。南関柳河行これなり。二十三日、本飛行を決行す
るに先立つて、幸ひに試乗してその太刀洗より郷土訪問飛行の本懷を達するを
得たり。恩地画伯、長子隆太郎と共なり。ここにその長歌十七篇短歌二百五十
三首を録す。

序篇

海を越えて

七月十八日朝、関門海峡を渡る。

海を越ゆるただち胸うつ国つ胆きも我が筑紫なり声に荒くも母おやの国筑紫この土我が踏むと帰るたちまち早や童わらべなり見るただち顔に溢あふるる親しみは故郷ふるさとにあれや帰り来にけり

我が言へば音の響に添ふごとく響き応ふる国人君は

明日飛ぶと

雲美しき山門のまほらここにして我はや飛ばむ高き青雲

南風のむた真夏大野を我が飛ぶと明日待ちかねつ心あがり

産土よこの山河をかくばかり直にし見ずて我恋ひにけり

山門の歌

山門はもうまし耶馬台、いにしへの卑弥乎が国、水清く、野の広らを、稲豊に酒を醸して、
菜は多に油しぼりて、幸ふや湯の貢と、珍の貝・ま珠・照る鰭。見さくるや童が眉に、霞
引く女山・清水。朝光よ雲居立ち立ち、夕光よ潮満ち満つ。げにここは耶馬台の国、

不知火^{しらぬひ}や筑紫潟、我が郷^{さと}は善しや。

反歌

雲騰^{あがうしほ}り潮明るき海のきはうまし耶馬台^{やまと}ぞ我の母国^{おやぐに}

妻と子らに

汽車いよいよ生国筑後に近づく。

筑紫野は大き出水^{でみづ}の田つづきを簑笠^{でみづ}つけて人遊ぶかに

筑紫は我^あを生ましける母の国大き出水^{でみづ}の田の広ら見よ

父我はここに響けりまつぶさにこの愛^{かな}しかる山河は見よ

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青とに染められにけり

「雀の卵」

夏山は赤と青との雉子馬の清水寺も雨こめにけり

夏かすむ女山ごやまの岩かうごいしの神籠石ふ老け鶯も谷にくだるか

午近く、大牟田に着けば、既に師友、肉親の人々、柳河或は南関より来りて、我等を待ちたまふに会ふ。

我が帰る心矢のごとありけらし早や着きたりと笑ひて泣かゆ

南関・外目篇

肥後玉名郡南関なんくわん、そのかみの関町せきまち、その字外目ほかめは我が母の生地にして、我にも亦、第二の故郷たり。乃ち、大牟田より先づ出迎の叔父たちと共に上内の山を越えてその土を踏む。親戚知音の人々の喜びかぎりなし。一夜、町の招宴に臨み、竜田川の橋ぎはなる島田家に泊る。翌十九日、外目近郊の外祖父母の墓に詣で、後、石井本邸に帰る。山河旧のごとくなれども、その母の生家は既に昔の倅なし。

索麴の関町

掛け竝なめて玉名少女が扱こきのばす翁索麴さうめんは長きしら糸

手うち索麴戸ごと掛け竝なめ日ざかりや関のおもてはしづけかりにし

山間やまあひは貧しき関のありやうを暑き日ざしにて敢て見て過ぐ

恩賜の時計

南関田町の島田家は我が母の異母姉の家なり。従兄敏三は帝大法科に学びて聞えし俊才なりき。いま一家すべて死に絶ゆ。

しろがねの恩賜の時計、畏かしこむやその子秘めにき。秒隔おかず死ぬまで愛めでぬ。子が死にて愛かなしき時計、形見よと、父は後愛あとめで、命よと、いとほしと、日も夜も持ちき。時刻むその秒の、その秒すらも絶えざりき。その小さき恩賜の時計、父死にて母に伝へき。その母も、

ちちちちと、その音聴きき。子の敏^{びんぎやう}三あはれよと、命よと、また継ぎ巻きぬ。生けるあひだ、その臨終^{いまは}まで、その螺子^{ねぢ}巻きき。人の世の真実の、この音の、つきつめにけり。

反歌

時計の秒針^{はり}は進むと子が死にて父へ母へとつたふる絶えぬ

老柿

島田家その後、従妹類子（北原氏）夫妻之を継ぎたれども遠くロスアンゼルスに在り。一の叔父隆承老その跡を守る。老は生来徳望高く、今また南関町長たり。

中庭の柿の老木は庇より手のとどかむに暑き日照ひでりや

乏しきを老いて豊けき大人見れば鶏割とりさけ風呂焚け造酒みきよと麴めんよと

割さく鶏とりの胆青きもきまで下照したてらす柿の葉ごみに風とどまりぬ

低屋根に鉄砲風呂の煙立ちあくまでも暑き西日たもてり

外目、祖父母の墓に詣でて

お墓山煙草の花にふる雨のほの紅あかうして身はうつつなり

この道よ椎の落葉にふる雨のいたくもふらねよくしめりつつ

外目、石井本家

母の生家石井家は南関の西、外目の丘にあり、いま二の叔父貴道氏、その兄に代りて本邸にあり、而も世の転変は甚だしく、旧時の高閣既にその半ば取りこぼたれ、庭前庭後、ただ荒るるにまかせたり。

百日紅さるすべりおいき老木しらけて厠戸かはやどの前なる石もあとなくなりぬ

白き鶏かけあさりさわめく影のみぞただに照り反る動きにてあり

老樹なほ存す

背戸柿やこれの爺おぢさが木洩れ日に身うちゆるがし我ら遊びし

蚕室の跡にて

玉名のや少女をしめくちた索緒をしめくちたて煮る繭のころろ小をどる玉白かりき

そのあたりの家々をまた見てまはるに

粗壁あらかべに影して低き草庇いまも山家は貧しかるなり

零余子

裏なる三の叔父武雄氏を訪ふ。

七面鳥乳嘴にくしかき垂り尾羽張りてとめぐる庭の日ざかり今は

病み臥こやす人が眼うつす外との庭に零余子むかごそよぎてげに外目ほかめなり

遠近を眺めて

高き屋に常眺めてし前の山いまも恋しき一つ松見ゆ

上内は谷をへだつる前の山肥後と筑後の境松あはれ

§

母の里外目の夏は月夜には笛おもしろく子ら吹き立てぬ

横笛は子らが手づくり南瓜の花かかるあたり月夜吹きつつ

§

幼なくて裸馬^{うば}をせめたる山坂に磨墨川といふが響きし

§

赤ん谷山桃実る梢^{うれ}越えて鷺巢^{わしのすやま}山は雲近かりき

夏山は霞わけつつ持て来たる山桃ゆゑにそのよき姥^{うば}を

（母の乳母）

柳河・沖端篇

青櫨

葉がくりにいまだか青き櫨はじの実の幼なごころよ我はゆめみし

とりで 櫨はじの木群こむらの深みどり我が水上みなかみはみ霧霽れつつ

やまと 山門は丘も水際みぎはも櫨群はじむらのたわわのみどりしたたりにけり

瀬高にて

十九日、外目を出でて筑後の瀬高へかかる。上庄の江崎氏を訪ふに

酒屋には酒屋よけむと嫁に来しお加代姉きもただの古婦ふるづま

空飛ぶを弟がおとあやつる翼かと早やおぼすらし声おろおろに

御許には童女おもと童数群れて亦若かりしけぶりだになし

童女柳河

午後、いよいよ郷里に入る。柳河女学校にて

額髪ぬかがみの笑ふ女童あまめわらはこのごとくあどなきものを恋ふとありにし

我老いぬただに愛かなしき額髪ぬかがみの面かほあげてあるその子ら見れば

夏ごろも匂ふ少女は朝ひらくからたちの花と清^{すず}しかるべし

中学伝習館にて

我、中学伝習館を学業卒へずして去りぬ。寧ろ追はれたるにちかし。而も我が
今日ある、恨無くしてただ感謝あるのみ。

儼^{やろ}はれし我の来^こし方^{かた}ここに^こして早や遙かなり帰り今在り

これの子ら歎^{なげき}知らざり我が言^{こと}ふをただおもしろと笑ひ爆^はぜたる

我が声にひびき応^{こた}ふる子らありて顔ことごとく笑ひくづれつ

沿道

沖端に近づくに、城内、矢留やどみ両小学校の生徒、既に旧藩侯邸の前に整列して
我が一行を迎ふるあり。雨中三時間の余も佇立したりきと。

雨に佇たち並びるやまふ子ら見れば我幼なくてかくも迎へし

林泉の鴨

旧藩侯邸の林泉は古来の名苑にして、所在の鴨おのづからに集り嬉遊するもの
数を知らず。

石多き林泉しまのたをりにつく鴨の寄り寄りにさびしおのがじしをる

この林泉しまに潜かづく野鴨の夏鴨の数は光れど広き水の面も

か広びろくて却かへてしづけさまさりけるこのよき林泉しまに鴨おほくある

昼の林泉石しまいはのあひさにゐる鴨の一羽は黝くろしつれづれの鴨

泉石せんせきのここだあかるき真日照まひでりに青鷺が佇たてり泛うく鴨のあひだ

日のうちも幽けくあらし引く水のかがよふ方へ鴨の寄り行く

日は暑しまし林泉しまの撓たをりにつく鴨のゆきあひの鴨のくわうと啼きたる

林泉^{しま}の鴨おほに遊べばゆつつ方荒き野鴨も下^おりて来にける

林泉^{しま}や夏空の広らを飛び来^{きた}る荒き野鴨のふりもおもしろ

林泉^{しま}や夏この夜浅きに水にゐて月の光を潜^{かづ}くものあり（その後に夜一首）

矢留小学

遂に我が唯一の母校矢留小学校に臨む。乃ち我、故老、旧知、児童を前にして
嗚咽、しばし言葉絶ゆ。

息つめて子らまじろがず空飛ぶに何悲しきと思ふなるらし

我が言ひて絶ゆる言葉は子らはいざ老いたるどちや知りておはさむ

雲仙の山を眺むる朝霞ここに学びて童^{わらべ}なりにし

村社、太神宮に詣でて

宮裏はそこらの砂の日に蒸れて土^ど糞^{ふん}のにほひいまにをさなき

裸^{はだし}足には小砂ざらつく絵馬殿に幼なかりける子ら遊びにき

神にうつ太鼓はその朝やとうとうとあげてゆくらつづけぬ

宮司は旧師木下登三郎先生なり。ぼそぼそと老いたまへり。

この神酒みきは中ほど黒き土器かはらけにとよと注がれていや沁みにけり

展墓

専念寺薨くろみて閑しづかなり我が寺と思ふはひりの照りを

閻魔堂草むす軒のうらべよりつぶやききこゆ蜂か巢くごもる

夏た闌くろくる寺のお堀のとちかがみ源五郎虫も黝くろみつつあり

夕風はいきる草を墓所はかどには人多さはに来居きをり我が泣かむ見に

明治三十四年、十三にてみまかりし妹ちか子の墓は、まだ土を盛りしままなり。

土に沁む線香の火のまだ見えて散るいくつあり青き折れ屑

沖端

柳河の西南半里、我はこの沖端に生れぬ。漸くにしてその石場に歸るに、すでに夕に近し。町には祭の楼門チヨウギリといふものを我が為に立て、人々、また宴を張りて泣く。

街堀^{まちぼり}は柳しだるる両岸^{もうぎし}を汲水場^{くみづ}の水照穩^{みでりおだ}に焼けつつ

かいつぶり橋くぐり来ぬ^こ街堀^{まちぼり}は夕風^{ゆふなぎ}水照^{みでり}けだしはげしき

我が見るは入日まともにさしあたる駐在所脇の二挺堰にちやうゐびの渦

町まち 祠ほくら 石の恵美須の鯛しゆの朱の早や褪せはてて夏西日なり

その日に

もの言ひて前かがみなる甚吉は柳の洩れ日まぶしむならむ

菟蓐屋おとの弟の末吉泣きめだち女子めのこさびしか今は媼をばめく

葉柳や今の日ざしに相見れば誰彼の頭づも薄くなりつる

生家

我が生家は今、人手にわたりて、とどろしき鐘詰工場となりぬ。初めて妻子を伴ひて、この我家にあらぬ家の門をくぐるに、胸塞がりてまた言ふこと無し。

泣かゆるに日は照り暑し湯氣立てて煙あげまきを今釜かまに煮沸す

照る砂に雷管のごと花落す朱欒ザボンひとき一木が老いてお庭に

棟瓦むながはら千石船の朱しゆと碧あをは正目まさめ仰ぎて深き雑草あらぐさ

鍋二つ汲水場くみづに伏せて明らけき夏真昼なり我家わがやなりにし

白栄しらばえに蛇奔くちなはる裏堀は水紋すゐもんの動き光かげとありつつ

我が書齋たりし隱居家は、なほ遺れども、既に久しく鎖しぬ。

空しかり縁に眼をやる泉石せんせきも常水つねたたへ濡れてありしを

我家は菅家くわんけの裔すえと宣のらしたる大伯母おほをばましき敢て読みにけり

我が幼な遊びの穀倉こくぐらいまなほ存す。外壁破れ、ひとへにあはれ深し。

穀倉こくぐらは外板壁そとのか黝くろきが日中ひなかの堀に影映すのみ

十数棟にもあまりし酒倉の跡はと見れば

五月雨に麦は落穂も取り入れずて染色黝しみいろくろし土に還かへらむ

青光るめくわじやの貝に眼は大き鴉降りゐてまた早ひでりなり

三日三夜みかみよさ炎あげつつ焼けたりし酒倉の跡は言ひて見て居り

沖端の鹹川

葦むらや開閉橋かいへいけうに落つる日の夕風にして行々子鳴く

潮の瀬の落差らくさはげしき干潟には櫓も梶も絶えて船の西日に

洋越わたゆと六騎が伴ともは舟竝なめて勢きはひ傍こぎ連れ矢声あげにし

(鮫鱈組)

夕風の干潟に黒き粒だちは片手の小蟹貝ひろひ食ふ

註、ここの蟹すべて片手なり。

西日して潮満つるまの夕干潟営み長く蟹ぞつぶやく

夕風の干潟まぶしみ生貝や弥勒むく子の額髪にして

西日には蟬むきて居るならし後姿気ぶかき四五の女童

女童や我は思へば額髪のかぐろき瞳此方見あげつ

潮くさき突堤に沁むる夏西日音あわて落つるむつごろ影あり

註、沖端にては突堤をうろこと云ふ。石にて鱗のごとく畳める故なるべし。尚「むつごろ」は小き山椒魚に似たる魚にて、よく潟を走り、突堤の石垣にも登る、前世紀の遺物の由。日本にていま棲息するはこの土地のみ。

魚市場落^{いりひ}日あかきに手品師は鰐までもりゆうと刀^{たう}を吞みつも

乳母

字、筑紫村のほとりに、妹の乳母を訪れて、同じくその日、

風かよふ蘆のまろ屋に息ほそり白鷺のごと臥^こやる姥^{うば}はや

老の息かくて絶えなむ女めわらは童はの陰ほとどころさへも知りきと泣くを

朝の揮毫

柳河町の旧友川野三郎氏宅に泊る。盛んなりしこの柳河にての歓迎の一夜も明けて、

墨を磨り若かへるでは朝あさ光かげのすずしきがほどをゆとりもたなむ

夏の三柱宮

高島公園の三柱神社は藩祖を祀る。二十日、ここに詣でてまた幼き日を偲ぶ。

太鼓橋欄干橋をわたるとき
幼子我は足あげ勢ひし

三柱宮水照繁なる石段に
瑪瑙の小蟹ささと音あり

神楽殿砂吹きあぐる白南風に
小蟹ちり走る鋏立てたり

宮地嶽神社は、その裏参道にあり。

鹹涸川堰の下の葦むらに行々子鳴きて
鳩はお堀に

水路舟行

二十日、再び沖端に歸りて、人々と共に楽しむと柳河まで小舟に棹さしのぼる。
 恩地画伯も同舟なり。

我つひに還り来にけり倉下くらしたや揺るる水照みでりの影はありつつ

註、倉下とは倉の庇の内らの壁。

夏真昼ふるさとわが故郷とは外に干して巻線香のにはひかなしも

しづかさは殿とののお倉ひるねずみの昼鼠とちよろりとのぼりまたも消けぬかに

註、昼鼠とは土俗に水陽炎の影をいふ。

御船倉水照みでりゆたかに舟うけて吹き通る風の夏はすすしき

御船倉いとど明るき水の上は蛙のこゑもよく徹るなり

水のべは柳しだるる橋いくつ舟くぐらせて涼しもよ子ら

土橋をわが往きかへる柳かげ青銭一つ投げてわたりし

南風すずし籠飼あげをる舟わきをわが舟にして声はかけつつ

風のさき黄なるカンナ群落に舟棹しかへす今はまぶしみ

橋ぎはの醤油竝倉西日さし水路は埋む台湾藻の花

背戸ごとに小舟纜へる汲水場にはをりをり女居りて日暑し

夏堀^{なつぼり}と狭む^{せば}水曲^{みわた}の葦むらはたださわわし小舟^{こふね}棹^さしつつ

二十年前

処女詩集「邪宗門」の上梓の直後なりけむ。かかるわかき日の帰省の夢を境として、その後二十年絶えて帰省することなし。之等の感懷も今は昔となりぬ。

合歡

葉のとぢてほのくれなるの合歡^{ねむ}の花にほへる見れば幼な夕合歡

水のべにいまだをさなき合歡の花ほのかに紅^{あか}く君も眠^ねななむ

鳩の浮巢

水の街棹^{まち}さし来れば夕雲や鳩の浮巢のささ啼きのこゑ

旗雲と匂だちたる月の出はたぐふすべなしあかき旗雲

幼な遊び

過ぎし日の幼な遊びの土の鳩吹きて鳴らさな月のあかりに

爆竹の花火はぜちる柳かげ水のながれは行きてかへらず

汗あゆる夏のゆふべはすがすがし葦の葉吹きてあるべかりけり

菱売のこゑ

都べへ立たむ日近し菱売の向脛むかはぎ黒く秋づきにけり

童子柳河 追憶篇

馬

馬描^かかば前脚曲げて、蹄上げ、内腹蹴れと、尾の張りに力こめよ、跳ぶごとく描けよと見せぬ。土けぶり後^{あと}にあがらむ、勢^{いきほひ}や和子^{わこ}もかくあれ、早や描けと筆持たしめき。末^{すゑ}爺^{ぢぢ}、三代に仕へて老ゆる大^{ちち}爺^ぢよく馬描きぬ。よく見よと雲に馬描く和子や我や、三つ児のたましひ、かくぞ生きぬく。

反歌

馬描かば内にためたる蹴上げよと老いたる泣きぬ幼児に言ひて

描く馬よ青雲のぞむ勢いきほひの上なかりしが墨はかすれき

石合戦

石うてやよしや若殿、何負けむ、石場の子ら、小舟にて早や漕ぎ出だせ、石積みめよ、水棹みさを
とれ、土橋どばしくぐれ、鳩鳥の火の点つく頭あたま、いま夕日、それとかかれと、我が仰ぐ館やかたの築地ついち、
濠めぐるここをよろしと、采配やささとかかれと、前うちの金の鍬形、紙鎧、桜緘の大將
我は。

反歌

十二万石殿とのの若子わくごはさもあらばあれここに六騎ろつきの町の子我は

註、石場は字石場町、六騎とは平家の六騎、ここに落ちのびて漁る。故にこの

町の漁師を時俗六騎と呼ぶ。

外ながめ

風の日は風をながめて、雪の日は雪をながめて、玻璃戸越し、大きな店さき、朝には餅焼か
せて、日暮にはお膳並べて、さて師走、我が家の市、馬ぞ、鮪しびぞ、鰯いわしぞ、牛ぞと、おもし
ろと、見るとながむと、子供らの一の和わ子こ我は。

反歌

外そとかはや厠戸ごとあけたる町すぢに冬は西日の寒けかりにし

初売

あらたまの年のはつ売、暁を大戸あけさせ、早や待つに挙り入り来る。たうたうと人ら入り来る。^{やまきた}※の濃染手拭、酒の名の「潮」^{うしほ}の盃、引出よと祝ふとわけて、我が老舗酒はよろしと、^{あら}新の榲酒に磨くと、春や春、造酒よ造酒よと、酒はかり、朱塗の樽の栓ぬき、^{だぶす}神もきかせと箍た^{たが}たき、たたきめぐれば、ほのぼの明けぬ。

反歌

春の夜と滴り^{したた}あまる豊造酒^{とよみき}は朱塗の樽に添ひて流れつ

習字

太竹の青き筒、つやつやし筒に、たぶたぶと素水^{すみづ}入れ、硯の水清^{さや}けし、墨磨れと、傍^{かた}注ぎ、注ぎてまはりぬ。^{きは}勢ひける何なるならし。幼などちそのかの子らの、筒袖の、その中にしも級長われは。

反歌

女童^{めわらは}はほのかなりしか小硯の赤間が石^{せき}に墨片^{ぼくぺん}避^よけて

雲畦先生

幽人雲畦先生は我が書の師なりき。

よく坐^ましきあてに墨磨^{すみ}り唐^{から}やうの画^えをたしなみと書^{しよ}を楽しみと

田のそなた堀に柳のしだれたる離家^{はなれ}の窓に老いていましき

藩札

藩札は赭^{あか}き紙ぎれ、皺^さに寂^かび黴^びくさき札^{さつ}、うち廃^{すた}り忘れし屑、うち束ね山と積めども、

用も無し邪魔ふさげぞと、放^{はふ}られてあはれや朽ちぬ。竹鉄砲紙の弾^{たま}丸よし、火花筒につめ
よ押しこめ、煙硝よ染^しめとはじけと、ぱんぱんと響け、火花よ飛びちれと、幼な児我は。

反歌

しゆうしゆうと花火ふき出^づる竹の筒幼^{をさな}らすでに勢^{きは}ひそめにし

青銭

青^{あを}銭^{ぜに}は穴あき銭^{ぜに}よ、字のおもて寛永通宝、裏に波文久永宝、よく数へよく刺し貫^ぬくと、
手もすまにそろへて締むと、幼な児や息づかし我、青^{あを}太^{ふと}藺^ゐ絢^なひし小繩の、撚^よりつよきそ
の緒くくりて、夜々をなげきし。

反歌

青錢の穴あき錢をかなしよと父のみ前に貫^ぬきて数へつ

魚市

魚市は師走の市、歳のすゑ、大つごもり前の三日^{みつか}、雪よ霰^{あられ}ふる中を、塩鰯^{しほ}や、我が家の市、競^{けい}り市や、魚市場^{いぐさ}、戦^{いくさ}や、船に馬^{だいはち}に大八車^{だいはち}、わさりこ、えいやえいや、かららよ、えいや、えいや、人だかりわらわら、はいよ、天秤^{てんびん}、担棒^{おうち}、走る走る、えや肩搔^{かき}きわけて。

諸^{しよ}国^{こく}船^{ふね}歳の塩鰯^{しほ}競^{けい}りあぐと寒^{かん}もものは裸^{はだか}でおらぶ

千石船

師走^{しはす}業^{がふ}我が家^やの市^しは大^{おほ}歳^{どし}と千石船^{せんせきふね}の群^むれて泊^はてにし

南^{みな}風^{かぜ}にして千石船^{せんせきふね}の箱^{はこ}ぐるま金比羅^{きんぴら}までも我^{われ}は曳^ひかせつ

籠

籠^{へら}や籠、漆搔く籠、籠はよし、色搔き交ぜ、たらりとよ、垂りしたたらす。ぬめりや漆の
 ねばり、たらりとよ一つ反^{かへ}し、つるりとよ二つ反^{かへ}し、日に透かし、時をや見る。乾きや潤^{うる}
 ひや、にほひとや持ち味。漆は、漆はや、あやかし、こは子らよ生^{いきもの}物、かく言ひて一つ
 反^{かへ}し、二つ反^{かへ}し、たらりとよ、つるりとよ、爺^{をぢ}は見てゐつ、春の日永を。

反歌

滴^たりいとど仏師がい搔く赤漆籠うちかへし春もいぬめり

白鷺 童ぶり

夕焼には、夕焼にはの、白鷺が紅^{べに}つける。白鷺が潟のそりに足なづむ。簑毛風にそよい

で。ハレヤ、霞の雲仙、島原は追風おひての一と潮、風さきの向う突堤うろこは三瀦みつまばの、のうもし。

反歌

春もやや潟の水曲みわたを行きありく白鷺の眼の黒くするどさ

童子柳河

涼しさは水豊かなる柳かげ葦笛吹きて我等行けりし

夏の照り葦辺行く子は魚籠びくもちて何か真顔まがほの我にかも似る

今ぞ見む郷国くにわらべは童がどの顔も我によく似る太郎によく似る
(妻に)

町内

菟蓐屋桶に諸磨り、飴形屋掛けて飴練る、蚊ばしらや春より立たむ。藍俵夏よ染み出む。
 綿うたす媼はさもあれ、提灯屋老の猫脊が、さてゑかく牡丹に唐獅子、太神宮祭近しと、
 子供組勢ふよろしと、えやうやと受け合ふものから、向ひ屋の浄瑠璃の師匠、越太夫を我
 は。

反歌

照る日には傘を干し竝め雨ふれば提灯に紅き牡丹描きける

柳河風俗

菱採りはか揺りかく揺り桶舟に両手搔きしてその菱堀を

菱売は久留米緋の筒袖に手も脛も黒く菱やとふれ来る

飛翔篇

太刀洗飛行場

昭和三年七月二十二日、午後一時十分、愈一期の郷土訪問飛行を決行せむとす。恩地孝四郎画伯同乗、幼児隆太郎をも伴ふ。乃ち太刀洗飛行場に参集す。

驟雨の後日あとの照り来る草野原きたにおびただしく笑ふ光を感じず

草原にまだ滴しづくする格納庫日は直射たださして白雨しらさめ過ぎぬ

蟻のごと兵列小さく曲り来て格納庫角かくの銀ぎんくわい灰の照り

照りを来し 頭^{かしら} 右^{みぎ}して過ぎにけり二列縦隊の地上作業の兵

空は夏光沢^{つや}あるはたてうるほひて格納庫の上の白き断^{きれぐも}雲

新野飛行士この人あり

飛行帽まぶかに笑ふ逞ましきこの赭^{しや}顔^{がん}見れば期するあるなり

単葉ドルニエ・メルクール機両翼張り大き安らあり尾を地に据ゑぬ

平らけき今日の地平のあさみどり軽気球あがる空氣がありぬ

音に澄みまはるプロペラ風速^{はや}し我が天翔る時ちかづきぬ

その後にて、妻のいふを聴くに

滑走し去りてふはりと上る^{あが}単葉機の流るるがごとき脊筋^{せすぢ}なりしと

雲ぎはに機体消えてより胸せまる虫のすだきを原に聴きぬと

離陸、柳河へ柳河へ

飛ぶただち空^{くう}と大地^{だいち}の入りかはるこの驚きに我^{われ}くつがへる

滑走しとどろ^{こた}応へしいつ知らず身は離陸して軽きに似たり

上昇し早や翼^{はね}かろしあをあをと退^{しぞ}き流るる筑紫国原

単葉のドルニエ・メルクール軽快なり今影落す遙か下の原に

雲の先遙かにし見む我が軽き合金属の銀灰の翼

上梶を護謨の滑車に照りつむる陽ははげしくて下空虚し

海胆なす草山脊筋朱砂なるが眼下に暑し匍匐したりぬ

久留米師団合歡ほの明し影つけて二列行進の兵隊が見ゆ

いよいよ柳河見ゆ

水多に柳しだるる四つ手網今ぞ盛夏の柳河が見ゆ

我が飛翔挙り出て見む郷人に心は昂れ虚しかりけり

故郷の

故郷^{ふるさと}の水のことごと、柳河や橋のことごと、たまゆらと、空ゆ一期^{いちご}と、我が見ると、飛
ぶと翔^{かけ}ると、我が和子^{わこ}連れぬ。

反歌

柳河は城を三め^みぐり七め^{なな}ぐり水めぐらしぬ咲く花^{はな}蓮^{はちす}

柳河上空旋回

草家古り堀はしづけき日の照りに台^{ウオーター}湾^{アヒヤシンス}藻の群落が見ゆ

柳河、柳河、空ゆうち見れば走り出^でる子らが騒ぎの手にとるごとし

大^{おほ}殿^{との}の濠^{ほり}は広らと水^み照^でりして内なる池の鴨むらも見ゆ

殿の池ここだおどろく鴨むらの飛ぶまあらせずその上過ぎぬ

うち低み榎^{ぐろ}か黒^{くろ}き布^ぬ橋^{のぼし}の日ざかりの靄我は飛び過ぐ

遂に恩讐を超えぬ

伝習館ここぞと思ふ空にして大旋回一つあとは見ずけり

沖端上空旋回

空よりぞ我が沖端を見る時し機体ことが光る眼なりき

鯉のぼりけふは視界に吹きながし沖端あり飛びて行くなり

S

矢留校身もて地に書く子ら見れば 白光つよしやの字一つ書く

矢留校に呼ぶ

子らよ見よ、我かく翔る、かの童、かく今翔る。空はよ、皆飛ぶべし、山河よ越えむに、
 時なし、またたく間で、鳴かぶら矢留の子ら、いざや勢ひ、土たたら踏み飛べや。

S

嵐なす羽風我が切りとよもすとの矢留の空飛び抜けぬ

泣かむかに我は突き入る低空を子らぞ騒げるその仰ぎ見に

命なり散華の五色^{ごしき}早や撒きて地に著かぬまを突入す我は

六歳^{むつ}の子が強く口緊め^しこらふるに父なる我^{われ}が何ぞわななく

S

風立てて我^やが家の空を過ぎにけるこのたまゆらよ機は揺れ揺れぬ

大揺れに我^やが家の蕙すれすれと飛び過ぎにける今ぞその空

我^{メッセー}が挨拶^ジ 夏は青田のただ中と子らを目がけて落下傘落す

雲仙と有明の海ひと目見したちまち^{わめ}喚き機は旋回す

右に見し今は左翼にある海の浩蕩として筑紫潟ここは

いや騰^{あが}り国原恋ふるその父をこの子は空に神を見むとす

父よ、児は遂に飛びぬ

父の顔ありありと見る雲間にて涙^{すぢ}条なす我^{われ}堪へむとす

大牟田上空

煙吐く煙突林^{りん}の大傾斜^{おほなだり}我が驚くと見やる間も無し

三池山中

この日、南関を見失ひ、あらぬ山中を旋回す。

夏照りの山の小峽をかひにひそかなる部落あり我は空ゆ見むとす

童わらべひとり空を仰ぐは山中に路あるならし歩みあるなり

南関上空

二十三日、本飛行に先立ち、南関の上空を求む。

母の里外ほかめ目の空は雨雲の間あひ青く潤うるひ母の眼かとも

山方は野町原町北の関その関越えて官軍は来こし

註、野町、原町ともに村の名。南関は西南戦争の時官軍の本陣なりし由。

棚畑の煙草の花の夏霞祖^{おほちち}父のみ墓今ぞ飛び越ゆ

石の井に釣瓶は置きて影ありしきのふの庭の空通り過ぐ
(二の叔父の家)

老人^{おいびと}のその眼に小さき愛^{はしたか}鷹と見え来む我か山は飛び越ゆ

町の長^{をさ}その老^{おい}ゆゑに山峡の小峡^{をがひ}の関に空翔けくだる

柿^{もろは}諸葉てらてらい照り黒瓦今ぞ見え来つその家^やとし見つ
(島田家二首)

その家の低空にして昨^{きの}浴びし風呂の煙の早や立ちそめぬ

老柿と築^{つきいしあぜ}石畦に日の照りて草屋がいくつ関のせせらぎ

幼くて裸馬をせめたる山河を桑の葉照に空かけめぐる

瀬高の上空をも、またあらためて

上庄棟もま黒に群がるはそのかの子らしよく生ましけり

本飛行

二十三日、はじめて本飛行に就く。南関の上空よりそのまま一路ただ大阪へ大阪へと飛ぶ。

天の路ひとすぢ徹り遥かなり今飛ぶべきはこの航路のみ

山なるは森巖にして雲湧けり梢かぐろき杉の群立むらたち

空行けば目も恋こほしかも山ふかく人居して衣干す見ゆ

物駭ものおどろき悲しかるらし山の峠嶮峻たをにして鹿走り出ぬ

プロペラは音ひびかへれいつ知らず密雲みつうんの中に入りて暫しばあり

新野飛行士生地の上を過ぐ、二首

密雲のま中衝きゆく我が下に嘉穂こほりの郡はありと言ふかや

山中は音響かへば雨雲の上行く脊をか妹見けむかも

夏山は思はぬ岩に飛沫しぶきしてたぎつ川瀬の水わかれ見ゆ

我が飛翔かけりしきりにかなし女子をみなこの小峽の水浴夏みあみは見にけり

飛びつつを行失^{ぎやう}ひし夕影はまさに女の脛^{をみなはぎ}を見けむか

深山^{みやまぎ}木の黒檜^{くろひ}の木群^{こむらほ}秀に濡れて降りしばかりの雲断^きるるなり

深山辺よあはれは久し人入りておのづからなる道通ふ見ゆ

四方の雲ひたに閑^{しづ}けくなり^ににけり山峡^{しやう}ふかく瀬のたぎち見ゆ

真夏空絶えず涌^くき来るいつくしき白木^{しらゆふも}綿雲の中わくるなり

ここの空真夏^た閑^たけつつしづかなり行きあひの白き雲の部厚さ

じんじんと山上百メートルを飛びつつあり緑に徹る命あるのみ

裸童^{らじう}居る山の中なる風景の何ぞ空なる我に笑^ゑみ来る

雑草^{あらくさ}の高原斜^{なだり}面緑なす気流に乗ると一氣に我は

ひた恋ふる地上のみどり逆^{ぎやく}にして流動し去る総^{すべ}てなるなり

国東^{くにぎぎ}は積乱雲のいや騰^{あが}る夏空青し灘に映るふ

ひた飛びに周防へ向ふ灘の空何か後追^{あと}ふ音ある聴かゆ

簑嶋は玉にかつづるひと簑の雨うつくしく光るその嶋

航空はしづけきものと人言ふを夕海の空をわたりうべなふ

翼^{よく}のうら滑車に映る影見れば微動しつつあらし飛行はつづく

飛ぶものは尾翼^{びよく}平らに今あらし瀬戸の内海^{うつみ}の夏夕霞

水平動感じつつあり夕暮は思ふともなく母恋ふらしき

天上に桃の和毛^{にこげ}をひた撫でてはかなやと言ふも我がうつつなり

たまゆらと翔るたまゆら天^{あめ}にして我がひた嚙^{かじ}るくれなるの桃

巖嶋潮満ちたらし海^{わたなか}中と鳥居ひたりて鹿あがる見ゆ

空に観て活字^{かん}函^{いへむら}なす家群に都市の真実の声はあるなり

夕かげは陸^{くが}の岬々^{さきざき}嶋の岬遠^{さきとほ}ながく見て高度^{かうど}行くなり

雲の塊^{くれ}夕紫に脈^{なみ}なして屋嶋ぞと思ふ嶋々暮れぬ

翼のかげ支柱に映りしづかなる飛行はつづく夕火^{ゆふほ}照る海

ほのぼのと匂ふ淡路のそなた空飛びつつは見ゆ霞む夕浪

早や愛^{かな}し和田の岬の夕潮に諸洗^{いも}ふごとく子らぞ混^こみ合ふ

水のべの天満^{てんま}の祭篝焚き空翔り来^こし我やそぐはず

終篇

二十四日、我空を飛びて大阪へ向ふあひだ、妻は子らを伴ひて、太刀洗より大分なる生家へ下る。我、行を了るや、その翌の日、紅丸に乗じて、そを迎ふと航海す。かくして、別府、大分、由布院に淹留旬日、再び妻子と瀬戸の内海を渡りて帰る。その折の長歌竝に短歌二三。

大分にて

白雉城^{はぐち}お濠の蓮のほの紅に朝眼^{あさめ}よろしも妻がふるさと

母びと

母びとはかなしかるかな。老いましてなほとやさしな。妻と来て、お許けふに来て、今日くつろぐと、子らもゐて。茶寮には灯ひのはひり、石いくつ水うつあひだ、彼方そなた見て、もの言ひてます物ごしのあはれ、よくぞ似る妻が母刀自、子らにもけだし。

反歌

水うちて残んの日かげ濡れたるにも言ひてます母のしたしさ

おなじく

街中まちなかは瓦重なる夕かげをまだじじとある蟬が庭木に

瀬戸内海

しづかや船ゆきゆく。安らや船ゆきゆく。飛ぶべくはその空飛びぬ。ひさびさや会ふべく
 会ひぬ。子らにしも父が母^{おやぐに}国、まつぶさに見よとし見せぬ。さて見むと、母の里をも、
 子ら見よと隈なく行きぬ。淡路嶋かよふ千鳥、明石の浦、このそよぐすすしき風に、親子
 づれ^{かへ}帰き安しと、この日なか、波折^{なをり}光ると、甲板^{かふはん}に鼠出でぬと、おもしろとその影見や
 る。

反歌

昨^{きぞ}飛びて空ゆながめし瀬戸の海を今日^{ふなぢ}船路行き波の面^もわたる

空ゆ見し全^{また}き淡路の夕がすみ船はすべなもただに片附く

あとのたより

君が飛ぶことごとの人^{ひと}が仰ぎぬと涙せりとぞ友ら言ふかも

その空は涙たまりて見ざりきと下べのその家我も見ざりき

郷土と雲海

昭和五年五月、かの郷土飛翔の事ありて翌々年、われ再び、北九州に所用ありて下る。この間一ヶ月余、郷里柳河、沖端、母の里南関、外目にも帰省するを得たり。その折の新唱之なり。なほ、この帰途、再び太刀洗より大阪へ、大阪より羽田へ一氣に飛翔し、感懷また新なるを覚ゆ。此篇またおのづからにして郷土飛翔吟の続篇を成す。録長歌四首、短歌九十五首。

帰省篇

月光荘雑詠

月光荘は柳河瀬高町高棕公夫君邸の離家に我が名づけしものなり。この行ほとんどこの水荘に宿る。

月夜

積藁に電柱のかげ傾^{かし}ぎゐて堀の向ひはよき月夜なり

この川やまだ張りすてて露^{あら}はなる蜘蛛手の棚もよき月夜なり

註、蜘蛛手は四つ手網。

月夜なり馬鈴薯畑ばれいしよばたの片側は壁白う照りて家廂やびさしのかげ

昼間見し麦の立穂たちほと思ふいろ月の光に見えそめにけり

きやろと啼きけろと啼きつぐこゑきけば蛙も月に出て遊ぶあそらし

内庭

庭もの面に月の光のありしとき楓かへでの影も椎しひとありにし

この庭の湿りがたもつ土つちのいろ月の光にかがよひにけり

月夜照る庭の木立をちかぢかと見つつゐにけり暗き渡廊わたりに

まことのみ吾あは言ひにけりよかりけり月の光に坐りつつ思ふ

註、昼講演せり。

うち白む月しろのありどの雲あふちのいろ櫓の花は揺れそめにけり

昼

縦川を斜に見やる縁の端はに吾が眺めつつ涼しがりをる

この節句せくの粽ちまきのしろと刈る葦のいきれは繁し中分けて刈る

国つぶり節句せくの粽ちまきは梔くちなし子この実に染めてから葦の葉に巻く

誰が棄てし暑さぞ

菱の葉に白き扇のなづさへばあはれ水^{みでり}照の夏も去^いぬめり

再び夜景

とちかがみ揺れ合ふ見ればいとどしく月明りして飛ぶ羽虫あり

月の空夜の明方となりぬらし黄にあかり来る麦の穂のいろ

水郷の朝

夏の夜ははや明けにけり瓦家の瓦に赤き煙突が見ゆ

やはらかきからしの莢さやに明あかる日の光恋こほしみわれは行くなり

荒壁あらかべに夏の朝日の照りてゐて漆の花の影もうつれり

うしろ射す夏の朝日にわが渡る土橋どばしのへりのすかんぽの花

土橋の朝まだ早し揺りゆりてそら豆売りが籠かつぎくる

花まじる深田ふけだの草の芒のぎの穂は夏の朝日に見るべかりけり

穂に立つ麦の畑なかみちの中道こは弧にうねりつつやはらかき土

しらしらと米の磨ぎ汁流れゐて藻の葉にまじる鮎あしのなきがら

つかがむ乙おとの女めわらは童影揺れてまだ寝起らし朝の汲水場くみづに

うちしめりなにか眩^{まば}ゆき午^ごの曇^{あふち}り櫓の花はいまだ了らず

裏町の媼

見るすでに涙はためつ。会ふすぐと眼に手はあてつ。およし媼^{をばうつき}六騎がながれ、我が乳母^{めのと}、
そのかの一人。笛鳴るに太鼓とよむに、水祭また御覽^{ごらん}ぜよ、舟よしと、さて棹さしぬ。蚕^そ
豆^{らまめ}と麦秋の頃、舟舞台水にかびて、老柳堀にしだれて、ひりへうと子らぞ吹きける、
撥上げてとうとたたきぬ。見えず媼^{をば}、舟多きから、我が言へば、さらばかくませ、この脊^せ
にと、両手^{もろてあと}後にす。さて負はれ、のびあがり、見ゆと見ゆとし我が言へば、なよあはれ、
五十年^{いそとせ}の昔の温^{ぬく}み、よろぼふ腰に力を撓^たむる。

反歌

ひりへうと笛が鳴るから夏祭^{さんじんまる}三神丸に小舟^{をふね}さもらふ

宮永の媼

海老腰や家の子の媼をば、寺詣で左手ひだりあと後あて、片手杖、なむなむの媼をば、和子わこよしと、こなた
 かなしと、ひさびさぞよくわせぬとぞ、せはしとぞ、早や膳かたへまゐる。あのよろし蟹しやこよ蝦蛄しやこ
 よ、それよこれよ、そをめせ、かくめせとあはれ、中つつき、殻からほじりあはれ。かの和子
 にもものいふさまよ、雛鳥にふふますごとよ、傍かたへつき、にじり寄り、さて暑さよとな、また
 あふぎゐる。ほれほれと箸もてまゐる。その和子はかくなる歳を、老いづくを、蟹しやこや蝦蛄しやこ
 さもこそあらめど、身の老の、その海老腰の、おのれ知らずて。

反歌

すかと剥はぐ蟹の甲羅は黄のころを尿ししぶくろほぜりとりてすてたり

女友だち

額^{ぬか}髪^{がみ}の幼な女^め童^{わらは}、そのごとく今も囲むに、早や老いて含^ふむものなし。子をなして幾^{いく}人の親、死なしめて後^{あと}のこる妻、姦^{かし}ましと世にいふ際^{きは}か、さて寄りて我にかくいふ。そのかみよ、那樣うれしと、ほのぼのと思ひ秘めきと、とりどりやひとりびとりに、吾^あこそよ吾^あこそよと膝すり寄せぬ。うち笑^ゑらぎ何すとすらし、泣かゆとて早や過ぎにけり。見る眼さへ鄙^{おう}の媼^なの齒ぐきあらはに。

反歌

女^め童^{わらは}に目もくれずとふ男^を童^{わらへ}は或^{ある}はほのに何かおそれし

大江の幸若

筑後山門郡瀬高在の大江の幸若は今日本に唯一のものとして珍重せらる。或

る日、特に迎へられてその大江の村社に参観す。柳河の老儒渡辺村男先生の東
道なり。社内、舞手と我等の外殆ど人影無く、俗塵絶ゆ。

蟬のこゑしづけき森のここの宮幸若かうわかの舞の時ぞ移ろふ

麦の熟れ蒸すや五月さつきの野平のだひらにお宮ましまし小つづみの音

曲舞くせまひの大江幸若おほえかうわか足ずりにえやとたたたと舞ひ澄ましける

立烏帽子たてゑぼし袴長引きち小刀すあを素襖の袖は張りて舞ひつつ

幽けさは笛や羯鼓かっこの外ほかにして舞ふものならし扇手にさ指し

打烏帽子脇と連つれとが片膝に待つ間かがよふひとひらの雲

舞殿の幕は匂ふ夏がすみ後水尾の帝くだしたまへる

人な知り宮の幸若足ぶみに遊ぶ五月のたたら曲舞

舞殿に舞ひつつ闌くる昼の照り撫子もちて仰ぐ女童

野の宮よ翁おきな おぐな 姫ひめ ののどのどに石につい居り舞ふを見に來し

墨の香のながれて鎮む青若葉誰に書けとふ紙かのべたる

城内

裏堀は藻をかいくぐる鳩居りて遙けきは啼けり城内らしも

或る月夜

竝倉のしづけき生鼠^{なまこ}壁月夜にて鳩は寄りゆくその向うの葦に

ユーカリのしろき月夜の陰^{かげ}にしてこなぎも花に咲きにつらむか

船小屋

湯の館^{やかち}築石垣^{いしがき}の間^{あひ}飛びて源氏蛸も早や末ならし

南関、大津山

一族、我が為に集りて、半日を清遊す。

大津山^{おほつさん}ここの御宮の見わたしを族^{うから}がものと我等^{われら}すすしむ

小岱山霞む表の端山には関の名残りの書院松見ゆ
せうたいさん おもて はやま

山归来葉や山は恋しき日の蒸に餅くるまむその葉摘みたむ
ばらんは こほ むれもちひ

北の関・南の関

北の関の村は、筑後の山門と肥後の玉名の境にあり、
それを越ゆれば母の里南の
関、関町ともいふ。

朱砂にして雨ふりながす朝の道山片附けば北の関見ゆ
すさ

ふかみどり櫨の木かげに佇つ見れば童女は愛し母によく似て
はじ た どうによ かな

たまなごほり
玉名郡関の山家は築畦つきあぜの石塊いしくれ黒く夏まけにけり

すさ
朱砂ながらさびし山家の壁のいろ薄日蒸したり母の関町

北九州雑唱

宰府道

筑紫の、櫨はじの木原こばら、木原には夕光ゆふかけ満ち、夕光に鸛鳥うそどり啼けり。宰府道、ここの木原に、
飼鳥かひどりの、よき鸛鳥うそどりを、もつ家やあらしも。

反歌

汗沁うそむる木彫うその鸛うそは手たにぎりて朝行きし前まへを夕ゆふかへりをり

観世音寺道

麦むぎの秋夕ゆふかぐはしき山やまの手に観世音寺くわんせいおんじの講堂こうどうは見ゆ

麦の秋觀世音寺を罷^{まか}で来て都府樓の跡は遠からなくに

夕あかる櫺^{はじ}の木むらの前刈るは誰が麦秋の笠の紐ぞも

水城

草ふかき水城^{みづき}飛び越え立つ鴨^{かる}の輕鴨の子をうつくしみ見む

雑餉隈、環水荘

この行、この加野宗三郎氏の水荘に淹留することまた数日なりき。

水環^{めぐ}る環水莊は降る雨のいろとりどりに夏いたりつつ

昼

雑餉^{ざつしよのくま}限^{つみ}池塘^{つみ}に映る床^{ゆか}高^{やうち}き屋裏^{やうら}に赤き金魚鉢見ゆ

菱生ふる広^{つみ}き池塘の中道は雨通らせて後^{あと}照^{てり}暑し

老櫓のこぼれ日あかく地にあるに蟻現るる待ち居り我は

積藁にひびく一つの爆音が太刀洗より近づくごとし

夜

ほのぼのとからし焼く火の夜は燃えて筑紫^{づしほり}郡の春もいぬめり

鬼菱の花さく池の月しろは夜のいよいよに闇^ふけて後^{のち}なり

呼子

名護屋城址

麦黄ばむ名^な護^ご屋^やの城の跡どころ松蟬が啼きて油蟬はまだ

韓^{から}の空の見はらしどころここにして太閤はありき海山の上に

おなじく、山下善敏君の山荘にて

麦の秋に白帆見わたす山幾重君^やが館^{かた}は伊達の陣跡

蒼^{あをうみ}海の鯨の蕪^ぶ骨^{こつ}醸^かみ酒のしぼりの粕に浸^ひでし嘉^よしとす

ここに^こにして十時伝右衛門の裔^{すゑ}の子と一夜^{ひとよ}勢^{いきほ}ひ飲^のみて寝^ねにける

註、柳河の旧友。

おほらかにありつる昨^{きのう}の朝酒と再^{また}眺^{なが}めして名護屋にぞ居る

呼子港

遊^{あそ}女^{びめ}が片手漕^こぎする舟かとも午^{ひる}ちかき照りの入江見てあり

飛行篇

白日飛行吟 飛行吟その一

まさやけく夏の微塵^{みぢん}の澄むところみ空は青し眼の極み見ゆ

三笠山さ青^をの尾上^{をのへ}に立つ鹿のかぼそき姿^{あめ}天^{あめ}にして見つ

青丹^{あをに}よし奈良の都の藤若葉けふ新たなり我は空行く

高行くはひたすら悵鬱^{さぶ}しまかがやき横たふ雲の眼^{ふた}を塞ぎつつ

高蒼空^{たかあをぞら}わがよるべなき単葉の機体の揺れは雲の撲^うつなり

鈴鹿山^{うつぎ}空木花咲きしづかなり飛びつつし思ふ夏ふかみけり

眼^{まな}下^{した}に横たふ谿は鈴鹿とぞ死の衝激をからうじて堪ふ

移りつつ雲はあるらし山^{やま}壁^{ひだ}の赭^{あか}きなだりに影のさしたる

雲海 飛行吟その二

雲に会ふ心したしく幽けかり高度の高さ思ふなるべし

人飛^つびて孀^ま恋ふる時し天^{あめ}なるや雲高光り音をひそめつ

しづかなる空の中^{なか}処^どに空^う洞^ろありて来^{きた}る待つとふけだしその空^う洞^ろ

天つ風山吹きおろし息^{いき}長しひた吹きあつる真向ひの雲

み身みしも隠り雲がくりまます山の巒また現れて事なきごとし

雲うんくわい塊は雲塊と触れとどろけり然しか思ふは我の澄みゆくならむ

眼のかぎり雲たな暈はるさながらを空にして思ふ大わたの海

噴く綿おだの穩しき雲たなの暈はり影しじ繁にして熱度けぶかき

雲塊の片陰附けばくろか黝なる鷹ひとつ飛ぶとさまかはるなし

紫外線はげしき昼は陰黝くろき雲片附きて位置は低めつ

雲海たなの雲暈はりはてなきは無風状態に置かれたるなり

挙げて光り眼は向けがたき天てんの濤なみ白雲角やくんかくに人交りける

天^{てん}の昼非常に光る雲^{うん}角^{かく}の頂にして鎮む物あり

独^{ひとり}神^{がみ}御身^{みみ}隠します時すらやかく雲海はありて被ひき

雲の海に我はひびかふエンジンの命なるなり航^ゆくとありつつ

雲海の莊嚴をしも我が飛びていつ果つるなし心^は食^くみ啖^くふ

雲隔つ友の葬^{はふりど}所^{かげ}光蒸していま暑からし蟬のしじ鳴き
(沼津上空)

羈
旅
小
品

昭和三年盛夏、常陸大津の海岸へ児童自由詩講演に赴き、その夜五浦の故岡倉天心居士の別墅に宿る。帰途、筑波に登つて山上に一泊。「五浦少女」「筑波新唱」はその折の歌。

昭和八年十一月、福島市の公会堂創立につき講演に赴く。「初冬信夫行」はその時の作。

昭和七年一月、妻子を伴ひて信州、池ノ平に遊ぶ。「雪に遊ぶ」はその折に作る。

五浦少女

大津

大津の浜目どほり白き波^{なみぎは}際^はを階上に見つつビールぽんぽん抜かしむ

順礼の墓

順礼の墓とふ影が^{たいしよ}大暑^{たいしよ}にて山のかかりにあるがしづけさ

順礼の山辺の墓は日ざかりをせせり浮きたり^{まり}腕^{まり}の清水に

五浦、潮見堂

潮見堂ここにぞ天心先生は^{うしほ}潮眺^{うしほ}めて飽かず^ま坐^ましにけむ

唐風からふうの画像思へば大きいまも寛ゆたけくここに居らすかも

六角堂庇にしぶく夕潮の涼しきがほどを我ら佇たち見つ

五浦少女

山越やまごえよ五浦少女、日中ひなかより影をつづりて、もてなしと我にまゐると、魚持とともて来く、瓶子か
かへ来く、五器そろへ、お膳持て来る。一閑張・筆・墨・硯、さて紙帳、くくり枕や、夜の
ものと衾ふすま持て来くる。額髪ぬかがみの女童めろも交りて、ほつほつと、ひとりひとりに、軽き提げ重き
はかつぎて、あなかなし五浦少女、草いきれ暑き小径こみちを、潮しぶく東の磯の潮見堂、その
母家おもやまで、山越え野越え。

反歌

山越はは日のあるうちぞほどほどに持て来てたもれ道は遠きに

おなじく

墨磨りに山路やまち越ゆると女童めわらはや硯も持ちて幼なかるべし

少女子や山は莠はぐさの夕かげに瓶子落して笑ひたるらし

また

早や帰れ火のひとつづり見え来るは迎ひの父ととか山路気づかふ

印度のタゴール翁ここに泊りしといふ。

かく在ありて跼坐ひとよし一夜をありけらしその縁の端はと思ふに我は

天心居夜情

岩の端^はにことりともこの家音^やせぬは人坐^まさぬらしすぎぶ夜の潮

潮ひびく君^{きみ}が館^{やかた}の跡どころ小夜ふけて聴^きくに磯は直^{した}ぐ下

草塚にこもるこほろぎ潮騒^{しほさゐ}のとどろ立つ夜を鋭^{とこ}声^{こゑ}しきりに

註、天心先生の墓あり。

筑波新唱

五浦の歸りに筑波の麓大宝村へ廻り、横瀬夜雨氏の邸にて河井醉茗氏と約のご
とく落合ひ、その午後一同筑波山へ登る。山上へ一泊す。

大宝村

ここの門底かどに繁き雑草あらぐさの内外うちとの暑さなほ消けち難し

庭苔ぢしめりの地湿ながら日おもては朝から蒸してこの大草屋

朝顔に

鉢にして花ひらきたる朝顔の五十あまり置きて足蹇君は

朝顔の幾花鉢や張る肘の君殿かしく膝は平らに

雲居立ち紫にほふ筑波嶺を麓に堪へて足蹇君は

山毛櫟と青がへる

筑波嶺のいただき清にうちひびく山毛櫟の林の青がへるのこゑ

筑波嶺のいただき通る夕立雨わたくし雨のくだり去りにし

山毛櫟の原朝居る雲のつぶさには下しづくして音果つるなし

小筑波や山毛櫨ぶなの下枝しづえの若萌に蛙ころろぐこゑのさやけさ

筑波嶺のいただきよりぞ見おろして雲はうち乱る 表おもてうら裏うらとなく

にひばり筑波をくだりあはれあはれケーブルカーの索条はや迅し

夜雨、山にのぼる

見てのみや泣きてこらへし筑波嶺を君いまはのぼる人が背そびらにて

君を負ふ人の後蹤あとつきのぼる道石ころ暑し赤き角かど々々

山のぼる人の背そびらゆもの言ひて筑波根草は君が教へし

まだ見えて人の背せにある君と思へ頂いただきの雲のいまはつつみぬ

高^{たか}天^か原^{まがはら}男^を峰^{みね}の岩のいただきに影黒くある君と思へや

夜

夜雨氏夫妻も泊る、生れて初めての蜜月遊ぞといふに、

女^め男^をの峰ひとつ筑波の頂にうべ鎮^{しづ}もらすこの夜いみじく

筑波嶺の男峰落ちゆく雲あらしふりつつもあるか下の葉山に

翌日、昼

負^おさりていや暑からしのぼりける眼^{まな}ざしたゆく今は下^{くだ}りに

筑波嶺にひとすぢかかる男女みなの川早やたえだえに君はありにし

筑波の歸りに

ここに見る霞ヶ浦は採る魚のわかさぎ色にしろく霞みぬ

初冬信夫行

伏拝を越えて

伏^{ふしをがみ}拝^{がみ}越えつつくだる道の奥道祖^{だうそ}の神に幣^{ぬぎ}たてまつる伏^{ふしをがみ}拝^{がみ}越え来てひろふ日のあたりこれよりやいよ奥のほそみち人^{ひと}像^{がた}と藁^{こづみ}の小積^{こづみ}は数^{かず}立ちてなほうそ寒き刈田つづくか

文字摺石

みちのくの信夫文字摺かくながら日の寒うある岩の面^もにして冬日ぐれ文字摺石の傍^{わき}遊ぶ子らが石蹴り音ひびきけり

福島対岸

ちびと啼く花吸鳥は水さむき阿武隈越えて何にかも来し

雪に遊ぶ

池ノ平

清らけく雪に遊ぶは白鷺の水あさりするたぐひならまし

今朝ふりて清明^{さや}けき雪や積む雪の踏めば粉に立つその浄^{きよ}ら雪

雪の原霧華^{きばな}咲き満つまさしくも白くさやけきこれや一^{ひと}いろ色

風やみて紫にほふ雪の襞^{ひだ}この片陰^{つじ}に集ひて居れば

妙高温泉へ下る

落葉松に夕粉雪ぞつもりける末うごきつつしみらなる枝
からまつ ゆふこなゆき

落葉松に粉雪ふりつむ日くれがたひた滑りつつ我はありける

積む雪の下深くゆく水あらし風かとも聴くにせせらぎにけり

滿蒙風物唱

昭和五年三月より四月にかけて四十余日、満蒙各地を巡遊す。満鉄の招聘によるなり。その情報部の八木沼丈夫君と同行す。歴遊するところ、大連を起点として満鉄沿線及び東支鉄道は満洲里に至る。尚ほ長春吉林間、奉天新義州間を往復し、また大連へ還る。即ちこの満蒙風物唱成る。うち二百十一首を録す。

遼東春寒

東鷄冠山

寒^{かんげつ}月は谷を埋^{しか}むる屍^{ばね}にまた冴^あえたらし或^{ある}はうごくに

命^{いのち}にて一人一人と跳^はび入りしまた声もなし塹^{ざん}の深きに

息はつめて死^{しかく}角^{かく}に對^{むか}ふ敵味方この壘^{るゐ}の中に敢^あて憎^{にく}みし

春ならぬ寒^{かん}靄^{あい}にしも日は照^てりてこの低^ひなだり小松繁^{しげ}かり

春寒^{はるふゆ}き旅順^{りょじゆん}の港^{みなと}見^みおろしてましぐらに駛^{はし}る自動車^{じどうしゃ}今^{いま}あり

大連、碧山莊

碧山莊は華工の收容所なり

へきざんさう
碧山莊 冬の日向ひなたを来る影の濃くしづかにて担ふ水桶

影つけて日向え選り来る荷かつぎの肩かへにけりたぶつく水桶

その裏山

人だかり大にんにく蒜の香かのはげしきは中なか分きかねつ旅に来てあり

はるやま
春山と山をうづむる大群たいぐんの苦力クリーさもあれや空は霞まず

かるわざ
軽業の子らひるがへる柱より光る春かもや山はとよもす

鳴くまでは白^{パイン}靈^{カゴ}の籠^{カゴ}手に据^とゑて爺^{とと}ぞ居^とりける春のひねもす

春なれや苦^{クリ}力の爺^{とと}は呆^ほけ笑^ゑみて十^{とさ}尺^かの煙^き管^{せる}吸^くひくゆらかに

くらくらと牛の頭^づ煮^くたつ大釜の湯^ゆけぶりにしもや夕日^{ゆふひ}ま赤^{あか}き

丸揚^{まるあげ}げと揚^あぐる魚^{さかな}は手^てづかみに早^{はや}や投^なげ入^いれて安^{やす}けきごとし

大連図書館にて

はげしかるピゴ^{ピゴ}ーの漫^{まん}画^がをかしとし泣^なきて遊^{あそ}ばむ旅^{たび}にあらぬを

金洲

冬来り城^{じやうへき}壁の上に立つ影の我にしもあるかひとり見おろす

岱宗寺^{たいそうじ}咽ぶ胡弓の音^ねは引きてまだ薄日なり寒^{かん}はゆるまず

熊岳城

熊岳城^{ゆうがくじやうかり}雁わたるなり仰臥^{あふぶ}しに春寒^とき外の砂湯にぞをる

望見山^{ぼうじさん}吹き曝^さらす風の風^{かぜ}さきは仰向^{へそ}きに臍の寒き砂湯や

砂湯にてかじる林檎^{ラマ}は喇嘛^{たふ}塔の風寒きからひた紅^{あか}き嚙む

春はまだ河原の砂湯上寒し風邪ひかぬまとそこそこあがる

枯野行く幌馬車^{マアチャ}の軋みきこえゐて春浅きかなや砂塵^{さちん}あがれり

湯崗子早春

湯崗子凍むる竝木の間に^{あひ}して帽子^{マオツ}の赤きつまみが行くなり

湯崗子氷は厚し我が買ひて赤き山^{さんざし}子をかき^{かじ}噛りつつ

遼陽

仰ぎ見てさむざむとある白塔^{はくたふ}の薄日なるなり巢くふ鵲

騾と馬と並び曳き行く荷の車焼鍋^{ランチウ}ならし甕^{かめ}高く積む

泥^{ぬかるみ}凇は薄日の土圀^{どゐ}に片^{かたよ}避けて人影^た顕つかそのほつほつに

寂びつくし楊やなぎも土圀どゐもあらはなりこの冬の日の道をひろふに

冬ふゆに楡れにしらしらとある日の在処ありど土圀どゐ曲り来て我は仰ぎつ

黒豚の仔豚走り出陽では寒し観音寺山の表おもてを来くれば

奉天南北

奉天北陵

かざさぎ
鵲の声行き向ふ北の晴北陵の空に雲ぞ明れる

みささぎ
太宗文皇帝の陵とふ北陵はけだし松の陵

みたまや
霊廟の南おもての日のあたり氷は池にかがよひにける

パイロウ
牌楼の影は日向と閑かなり
こまいぬ
狢犬が見ゆうしろなで肩

だんだう
奉天北陵の壇道を踏みのぼり来てひえびえとよし春の松風

寒空さむぞらにい照り映うつろふ黄の夢目いらかもあやにしてここは靈廟みたまや

森ふかし対つひ衝立つつ石獸せきじうの影多くして音無かりけり

陵みささぎのこの松かげに人をりて茶をたつる湯氣のほのぼの寒し

風鐸すずの音四方おとよもに起りて春あさし隆恩殿に向ひて歩む

朱砂すさの楼隆恩門に我が向ふ内庭うちにはさむし斑雪はだれ吹く風

帝王のただに踐ふましし玉ぎよくの階我ぞ踏みのぼる松風をあはれ

丹の柱にはしちがねいらか黄金つま夢の端しんりようにして寢まろ陵は見ゆ円からき枯山やま

鳶の声澄みつつ舞みささぎへれ陵の槐あんじゆは枯れぬ墳つかに槐は

角楼は石階狭し傍のぼる高壁の内外雪ごり積む
いしきだせま わき たかかべ うちと

瀋陽東陵

ひむがしのたふとき山の陵の松邃きところ古りし霊廟
みささぎ ふか みささぎ ふか みたまや

陵の山のおもての浅茅原いたくも荒れぬ松は邃きを
みささぎ あさちはら ふか

松が枝に粉雪ちらつく日の曇何鳥か啼けりあはれ陵
え こゆき くもり みささぎ

反高き磴道を来る人ひとり東陵はげに冬によき山
そり とうだう とおりよう

山水に青丹瓦ぞ古りにける美豆良の唐子描かばこの前
あをにかはら みづら からこか まへ

茶膳房雪ちらつけば鵲かささぎの声うちみだり松くに来るかに

鵲の飛ぶ影見ればふりみだる雪おもしろし黒と白の翼はね

誰たがこもる庫裏くりの障子ぞ廂はふり這ふ煙はしろしほのぼの湯気

撫順

露天掘ま澄みか碧あをき空際そらぎはを音とどろきてまだ余寒なり

天を摩す鉄のパイプの太腕ふとうでに重油ながれ落つる音は聴くべし

三月は石炭壁に沁む雪の斑雪はだれが碧し輸炭車湯気ふ噴く

炭層たんそうに千歳ちとせうづもる蓮の実も芽を吹き花の日に匂ふちふ

家の苞卵^{つと}ほどなる大きな瑇瑯の玉は妻に賜^たふべし

青きもの摘む子ならし笊^{ざる}寄せて石炭殻は指に搔^そき除く

長春近づく

黒煉瓦焼く火の火口^{ほぐち}夜は見えてけしきばかりを寒^{かん}ゆるぶめり

長春駅

日は黄なり屯^{とんづみ}積高き豆粕に噴き立つる汽車の煙影引く

鉄の罐^{かま}の大きい機関車まおもてを鐘うち振れり為すあるごとし

国際列車とどろ湯気噴く鐘鳴かまなりのじんじんと澄みて待つあるごとし

移民の群

曠野あらの行く四等車といふに面群かほれて生きたかりける冬も頼めたのし

鵲と楡

公主嶺

公主嶺馬駆る見れば裸馬らばにして著ぶくれの子が風あふり来る

寒々さむざむと屯たむろし移る羊にて端驚はしけば皆騒さわめきぬ

汽車は北へ

旅人我汽車たびとわれの窓べを飛び過すぐる木の葉のごとし風に追はれぬ

群れにけり曠野あらの寒きにぶしゆぶしゆと黒豚づれが土饅頭どまんちゅう食む

十三時

家の影隣に映り冬日なり表おもてしめたる村のひそけさ

端つまの反そり同じ影もつ家となり春はる先さきといふに寒ひき陽ひにあり

浮雲 一間堡にて

幽かすかに我は見るなり浮雲の二ふた塊くれ三み塊くれ野の空のはてに

難民ならし

いづくへ行く群ならむ空低く雲黄なる野に人つづき見ゆ

或る枯野

ただに見る影と日向の曠ひろき野につづく楊やなぎのすがれ木にして

冴えにけり楊やなぎは玄くろき根の土に春の温ぬくみの未いまだいたらず

ちかぢかと我は眺むる野の日向遊ぶ唐からこ子の影走りをる

冬榆

墨にして或あるは匂はむ枯から山やまの榆にれのほづえの細ほそ描がきの線

冬の榆しみの繁しみにほそき髪みの毛は梳櫛すの齒はに梳すく細こみなり

冬に観る榆の寒けき墨いろは毛描かの線に描かかば描かくべし

冬榆 その二

冬^{ふゆ}榆^{にれ}のしみか^{ぐろ}黝^{くろ}きほづえには^{かささぎ}鶺鴒^{かささぎ}らしき巢もあらはなり

しばしばも見つつ越え来つ^{からやま}枯^{から}山^{やま}や榆^{にれ}と楊^{やなぎ}の寒き日の色

寒きびし

条^{すぢ}ほそく隙^{ひま}漏る冬の日の光鶺鴒^{かささぎ}の巢は枝にこごれり

寒^{かん}林^{りん}に石^{せき}廟^{べう}小^ちさきこのあたり^{フンチャーツ}糞^{フン}叉^{チャー}子^ツ搔^かきて人暮れ早し

石^{せき}壁^{へき}の銃^{じゅう}眼^{がん}透^とす空のいろ^{カオリヤン}高^が梁^{りやう}稗^{ばい}は積みて冬なり

氷閉ぢきびしくしろき川ひとつただにかびろき枯原は見ゆ

或る野の夕光

くだら野の窪^{くぼ}処の氷ほの青し日の夕かけの近づきにけり

日おもてと家^{いへ}群^{むら}なごむ畑なだり 高^{カオリ}梁^{ヤン}の根はよく鋤きにけり

夕日照る枯^{から}山^{やま}なだり地に引きてその木がたもつ影のしづかさ

車挽きて騾^らと驢^ろ馬^ばと行くしづかなる夕かけの野に我も在るなり

夕光^{ゆふかげ}の疎林におよぶ野の平音^{たひら}きしませて行く車輛らし

平^{たひ}らけく枯^{から}野^のに明^{あか}る夕光^{ゆふかげ}の遠^{とほ}及^{およ}びつつ寒しともなき

行くものの何とはなれ移りゐてうらめづらしき夕光ゆふかげのいろ

夕光ゆふかげのかくうらなごむ枯野からのには色すらも声に顕たちて匂はむ

根黍

朝光あさかげの此方こなたゆ射せば縞目なす高梁カオリヤンの根は雪のごと見ゆ

畝うね竝みの冬ふゆ枯根黍がれねきびはてしなし夕あかかげ明く満ちにけるかも

落つる日に我がひた向ふ野の原は光しみつつすぐろなる土

朝出でて一往復ひとゆきかへり鋤くのに日の赤く落つるここは大陸

地平より根黍こ鋤き来し大人今正面まともなる入日に赤し

興安嶺を越ゆ

興安嶺を越ゆ

落葉松

興安嶺黒く繁み立つ落葉松の林は寒し雲の上に見ゆ

雪の線劃りて黒き落葉松の群落はよしほそき木の梢

谿なだりしづもる雪の片空は木群が黒しほそき落葉松

落葉松の木群が梢に立つ霧はかがよふ谿の雪解くるなり

札幌屯を過ぎて

岩膚の岱赭に蒼む色見れば斑雪^{はだれ}の雪解^{ゆきげ}下滴^{したた}りにけり

山中

興安嶺越えつつぞ思ふこの山やまさしく大き^{やまなみ}脈

日をつくし大き^{らじやう}螺^う状^{じやう}にのぼるとき興安嶺は深しと思ひぬ

白樺樹林

のぼり来て眼も澄みにけり雪の原に白樺の林しみみ光れり

谿^{たに}の秘^ひ所^そ雪の山原に細り立つ白樺の幹は光^さ発^{はつ}すなり

細木原しろく直立^{すぐた}つ白樺の木はだは清し雪の上に立^へつ

雪線

ここ過ぎて雪は空より新たなり山ぎはの線はいふばかりなし

北の秀^ほの雪に思へば霾^{つちふ}らし低居^{ひくゑ}る雲よ遠く来にけり

雪の襞^{ひだ}眼もすさまじくなり^{あま}にけり天そそり立^{くろ}つ黝^{いはかど}き岩角

山の秀^ほや真澄みて青く流れたる稜^{りよう}線^{せん}の空を飛^{つばさ}ぶ翼あり

春あさき黄と青磁との蒙古の市海^{いちハイ}拉爾^{ラル}あたりよき気流なり

興安嶺くだりつくして野は曠し赤き落^{いりひ}日に汽車はま向ふ

ハルビン
哈爾賓

松花江

松花江 解氷 未し櫓にして 船腹 赤き際まで 馳る

松花江 の 鱸凍れる 春早き 哈爾賓の朝の市 に行くなり

太陽嶋

霧ふかし 頭より かぶれる 紅き 布牛乳の壺を かかへたるらし

さすらへば 命に換ふる なにも も 売りつくし けり その 愛しきを

詣づらく朝の弥撒^{ミサ}にし毛の紅^{あか}き産子^{うぶご}抱き来て母貧しかり

太陽嶋夕づく塔に鳴る鐘の影ひたすらや振りにつつあり

墓地

露西亜びとは都大路の見とほしに先づ墓地を定め寺うち建てぬ

露西亜びとはみ墓樂しと花植ゑて日曜は来る椅子しつらへぬ

キタイスカヤ

キタイスカヤ昼のほのと職待つと手斧^{てうな}かたへに人い寝こけぬ

春早し何の刷毛^{はけ}かも丈^{たけ}なるを鳥毛と立ててベンチにはゐる

街の角冬は日向とひろげたる檻樓ぼろのつぎはぎに老嫗おうならありき

脛はぎの線颯々と行くいつくしき高踵靴ハイヒール見れば春早むなり

旅情

木製の羽折はねる黒き大鴉旅にし冬は買ひてかかへぬ

秋チュウリン林を出て来て思ふ露西亜の血と朝鮮とまじり少女なりにし

流離（白系露人のさまざまをまた）

国破れ人はさすらふ毛ごろもの氷の粉屑こくづ吹きよごれつつ

凍傷^{とうしやう}の膝に藁巻きるざりける爺^{おぢ}さが富める外套は見よ

酒みづき白髪^{しらがうな}嫗は前伏しにその戸の段^{きだ}に白夜^{はくや}こごえぬ

弾く手には破^やれ手風琴も鳴るらめど盲目^{めしひ}眼は開^あかず白夜^{はくや}昼ならず

松花江支流

橋がまへとどろ退^そくまもしづかなりわが汽車ゆ見る結^{けつび}氷^{よう}のいろ

声はして夜の汽車の外^とに消えにけり今^た発ちたるは蔡家屯ならむ

沙漠の移動

四平街

聞くだにも寒き鴉のま冬には空うづむとふ街に見あげつ

我が聞きて声泣くごとし夜酒欲^ほる自^しが外^{ほか}にまた影もあらぬを

声荒^{あら}ぶ幌馬車疾駆し星近^{さんかん}し三寒にしてひびく暁

鄭家屯郊外

外蒙古西吹きあげて東する沙漠の大き移動をぞ思ふ

註、蒙古の沙漠は東へ東へと移動しつつありと云ふ。

み冬の夕かげあかき砂すなの原そらめ空眼薄らに駱駝来れり

蒙古びと駱駝追ひつつ夕べなり早駢あとしりけに乘る驢馬の後尻

霾つちふらす黄沙わうさの平たひらただならず日は朱あけに澱をどみ蒙古犬吼ゆ

註、霾るとは遠く沙塵の黄濁するを云ふ。

ひた駢わうさけに黄沙わうさの原を乗り進む蒙古の騎馬は後うしろ見ずけり

毛ぶかくて両もろの耳蔽ふ蒙古帽彼ら怖れずその眼の光

黄沙わうさの原騎馬走る見ればおのづから直ただに専もはらに道とほりけり

蒙古^{モンゴル}児陀羅海^{トルカイ}低き沙丘の起臥^{おきふし}の涯^{はて}しもしらね草枯れにけり

蒙古風吹きもつくすか石積みて山はただ一つ低きオボ山

眼を放つ草原^{さうげん}の枯れ涯^{はて}もなし牛跳躍す落つる日の前

放射光^{はうしゃくわう}日は金色^{こんじき}に風ぎにけり地平に寒き梢^{うれ}の冬榆

未開放地^{みかいほうち}目も遙かなり牛馬豚羊まさしく小さくい群れ移ろふ

註、未開放地とは蒙古の主権を以て、未だ他国人（支那人をも含む）に開放せざる土地なり。

行く行くに一つの部落あり

真名井まなみわく沙漠のかげのひと屯たむろただにあはれに家居しにけり

宿舎にて

鄭家屯落つる日赤し疊にはざらつく砂の数光りつつ

傳家屯にて

傳家屯フウカトン夕かげ暗し地に低き土の家群やむらの煙あげつつ

赫爾洪得

赫爾洪得ハラハンテ夕日の照りにうつら出て駱駝もだ黙居り高き砂山

蘇支交戦の直後なり

赫爾洪得廢墟の窓に見とほして落日赤し汽車はひた行く
ハラハンテ らくじつ

地平の落日

此所にして地平は高しはろぼろに雲居垂れたり日の落つる雲
ここ

雲かとも山かとも思ふ地の黝朱蒙古は曠し日も落ちはてぬ
うるみ ひろ

雁わたる青磁の透る空のみぞ地平に残り砂山暮れぬ
かり すなやま

外蒙古雪のこるらし秀に浮きて遙けき山は島のごと見ゆ
ほ

砂丘つづく

砂窪に泡だちしるき雪のいろ 夕ゆふ光かけにして今は解けつつ

柔らかと砂山の雪の薄ねずみ 夕ゆふ棚たなぐも雲の色ふくみある

砂窪に火ほ照りで沁み入る日の暮は眼をつぶるまもけだし匂へり

塩包

影ここだアンペラ小積こづむ 塩しほ包づつみ いま逆光に赤き日はあり

満洲里

風車丘

蘇滿国境春冴えかへり砂山の低山斑雪また吹き曝れぬ

滿洲里風車片破れ吹き曝るる残雪の丘に寒ぞきびしき

砂寒き低山の裾を来る駱駝後先の影が夜明いばえつ

暁星や上眼駱駝はみ冬月庫倫よりかもこりもこり来し

風車丘ここにし立てば西伯利亜の低山つづき雲こごる見ゆ

駱駝の宿

内蒙古春おぼろならず早やい寝て駱駝が宿は月に鎖したり

駱駝づれ月夜寒きに膝折りて 高^{カオリ}梁^{ヤン}稗^{がら}の下ひびくらし

影^{さは}多に瘤ある駱駝膝は折りいづ方となき上^{うはめ}眼してあはれ

南満春来る

吉林

旅にして 春^{しゅんちん} 塵^{ちん} しげししばしも熱きしぼりに面^{かほ}をあてつつ

(二首汽車の中にて)

熊出でて昼立ち歩^{あり}く森の街^{まち}敦化の雪も春は解^とけなむ

漣や筏を洗ふかがやかし解氷期近き松花江^{スンガリ}見ゆ

流^{りゅうひよう}氷^{ひよう}に添ひつつ笑ふ漣の春かがやかに果しらぬなり

北山にて

春霞むここに花咲き我が居らば武陵^{ぶりようたうげん}桃源の思あるべし

北山ほくざんはのどけきみ山ひくやままる山の低山ひくやまよろひ勾かぎよき山

風の音喇嘛ラマ塔の背に起りしが春山なれや照りつつ止みぬ

昼霞あをに青丹瓦のしづもるは春山ゆゑにかがやかにして

旅舎

旅やどり勾やかなる窓との外との夕かげは見て何をとも待つ

三人の満人の姿夢に襲ふ

幽魂いうこんの来りな哭なくなる夜のほどろ春寒はるさむにしも酒やさめにし

南満春来る 吉林長春間

飲馬^{インマホウ}江その水のべに飲む馬の白きが匂ふ霞となりぬ

雁^{ガン}の群今かへるらし雪のこる遠^{あんざん}山の空をわたりて過ぎぬ

樽挽^{くれひき}は反^そるとかがむと手もゆたに大鋸^{おが}の長柄^{ながえ}を対^{むか}ひ揺り挽く

木叉^{ムウサアシ}子頬にあてて佇^たつ藍の服木根にも春はかがよふらしき

氷解け春の池塘^{つつみ}は遠目にも漣の刻み一面なれや

春いでてこぞり耕す鋤^はの刃は漣なしてかがやき連れぬ

春^{しゅん}昼^{ちゆう}や根黍^{こんと}かがやき黒豚の仔豚連れ走りよき霞なり

春は今農用馬車の野に見えて二頭三頭四頭早や前駆けぬ

見てよきは春の広野に輝きて耕馬かうまがたもつ揃ふ足竝

春夕

土糞トオフイヌ掻きほけくらす人居りて春あたたかき夕光ゆふかげめづ珍ら

春ゆふべ野焼の跡に佇める白き馬見れば尾に遊ぶかに

春の野は唐子からこいだ抱ける母も出て夕陽こもれるよき空気なり

春しゅん夕せきはひとり野の歩ありく馬をりておのづから帰る道知るらしき

早や点し物恋しかる灯のいくつ満洲にして春は幽けき

本溪湖

天霧らし降る雪見れば鵲や早や群れ飛び来いづこよりとなく

鵲は雪ふり乱る空にして色まぎれなし翻り羽ばたく

春雪のひと降りゆゑに飛び乱る鵲の羽もつやに顕つめり

本溪湖影清らなり春雪の後冷にして空の晴れたる

五竜背

衣そそぐ水にかあらし芽楊の外面光りて波紋のみ見ゆ

疲れけりとろむ蛙の音は聴きて五竜背温泉にどかと足投ぐ
田は鋤きてまた冷えたらし土の端に斑雪の色の明れる見れば

国境の春

解氷の渦巻きすぎき黄の濁り鴨緑江はむべ大河なり

一夜に春いたりけむありなれ河水張り裂けてとどろきにけり

鴨緑江照りひろびろしあきらかに流氷を追うて材を流すなり

鋼橋の遠き正面ゆ来る子らが衣手紅し目に近づきぬ

春まさに国の境の^{さかひ}大水とどろけば冬果てしなり

遼陽の春

春霞む^{はくたふ}白塔ならししらしらと我が見る方に今ぞ見えつつ

湯岡子の春

湯岡子遠く来りてあはれあはれ^{をしどり}鴛鴦の湯にひとり浸るも

うちこぞり湯川^ゆにとろむ^{ひき}蟻のこゑおろかながらに春ぞふけたる

娘々^{ニヤンニヤン}廟かすむ日^{あか}紅し見て居りてここらは低きいくつ^{からやま}枯山

鞍山^{あんざん}はまことよき山よく枯れてよき鞍型の春さきの山

金洲を過ぎて

大和尚山ねもごろ霞む麓べは春かたまけて
紅ホアンリイ梨の花

旅終る

山すそに桃の花さく大和路に茫漠とありし我が旅果てぬ

夢
殿

昭和三年初冬、国醇会の一行と正倉院拝観に赴く。その所産、「春日の鹿」
「正倉院御物抄」。

翌々五年春、満蒙旅行の帰途妻子と奈良に遊ぶ。その所作、「奈良の春」。

春日の鹿

三笠山

まとに見る三笠の山の朝霧はまさしく寒し奈良に来てあり

三笠山冬来にけらし高々と木群こむらが梢うれをうれ行く白雲

鳥毛とりげぐも雲風吹き乱りみ冬なり三笠の山のここや裏うらそ岨そば

正倉院前

朝ぼらけ春日野来れば冬木には二段ふたきだ白く霧ぞ引きたる

森の手に寒き校倉あぜくら足騰あがり正倉院は今ぞ大霜

春日神社

山茶花の朝霧ゆゑに傍かたへ行く鹿かの子の斑毛まだらいつくしく見ゆ

耳みみたぶ朶なかじろの中白かのこの鹿子雫して朝見あげゐる山茶花の霧

公園

頼めなく夕かがやかし神無月かみなづきわかくさ山の日あたりのいろ

つれづれとつくばふ鹿のいくたむろ夕光ゆふかけの野にあらはにぞ見ゆ

鹿のかげほそりと駈けて通りけりかがやき薄き冬の日の芝

冬薄日うらなく遊ぶ鹿の子のうしろ蹤つきつつ我も寒かり

二月堂

二月堂つくばふ鹿のつれづれと目も遣るならし寒きこの芝

秋の鹿群れる遊べど寄り寄りに立つもかがむも角無しにあはれ

猿沢の池

冬ちかき池のほとりの夕日向うつらとどまり鹿ぞ立ちたる

春日野

夕日洩る木の間に見えてかぼそきは連なき鹿の影ありくなり

鹿のこゑまぢかに聴けば杉の間のま一木のひとき黄葉もみぢ下明るなり

群の鹿とよみ駈け来る日の暮をひたととどまり冬は幽けさ

春日野の夕日ごもりとなりにけりさむぎむと立つ鹿の毛の靄

夜の小路

いつまでかもとほる鹿ぞ夜の街のまち家竝やなみの庇霜くだるなり

庇間ひあはひや奈良の夜ふけに頭たつ影の大きな鹿のもそと来てあり

池をへだてて

猿沢の柳の眺めさびにけり余光しほ暫ある興福寺の塔

池向ひ築地ついちに明る冬の陽ひのけ寒ふき下坂くだり鹿歩ありき見ゆ

正倉院御物抄

鳥頭とりがしら 漆胡瓶うるしのこへい かすかなりしろがねの鑲くさりうつつにぞ曳く

臍らふけち纈けもんの花文ざうの象はましろくてただに淨きよらの命寂さびたり

鳥毛立女屏風 一首

樹もとの下に出いで立つ女丹をみなの頬ほして陽ひは豊かなる香かぐはしき空

ほのぼのと貴き昼は我が入りて宝蔵の古りし墨に思はむ

金銅こんどうのこころ鳥首とりくび水瓶みづがめの口ほそうしてみ冬なるなり

雑塵ざつちんの遠世とほよの裏つつみうち透かし吾れ命あれや光り息づく

をとめ子の紅牙こうげの尺は花鳥はなとりの目もあてにして稚をさなかりけり

黒柿の蘇枋の絵箱山やまみづ水のながらふる音はしろがねに描かく

奈良の春

法隆寺にて

四十日にわたる荒涼たる我が満蒙の旅は、寧ろこの法隆寺を美しく見むためなりしが如し。

日の照りて桜しづけき法隆寺おもほえば遠き旅にありにき

朱砂すさの門春はのどけし案内者あないしやの煙管くはへてつい居ゐる見れば

春日向人影映る東院の築地ついちがすゑに四脚門見ゆ

夢殿

堇咲く春は夢殿日おもてを石段の目に乾く埴土

夢殿に太子ましましかくしこそ春の一日は闌けにたりけめ

夢殿や美豆良結ふ子も行きめぐりをさなかりけむ春は酣は

日ざしにも春は闌くるか夢殿の端反いみじき八角円堂

春日神社

馬酔木咲く春日の宮の参り路を蝙蝠傘催合ひ子ら日暮なり

夕寒き庇のつまに影あるは燈籠吊れり雨のふりつぐ

春日の夕闇の廻廊わたり行くほどはほの明あかりありて霧の春雨

柳なぎの葉にふる雨見ればしらしらと含ふむ馬酔木あしびも夜の目には見ゆ

大仏

灌仏会に参りあはせて

大仏殿にほふ霞の外とに据ゑて灌仏堂は小さき花御堂

浜名の鴨

昭和七年十月、遠州浜名湖畔鷺津に遊ぶ。「浜名巡航」
翌八年一月再び鷺津の本興寺を訪ふ。「続本興寺林泉」
「本興寺林泉」成る。
「白須賀」続いて成る。

浜名巡航

鷺津より

冬すでに雲は低きを船立ててうち出来にけりひびくみづうみ

館山寺内外

館山寺くわんざんじ松山おだ穂し湖うみを来てここは小春の入江さざなみ

秋晴の入江の水戸のさざらなみ鷹一羽来り屋やの上へにはをる

この船をすでに追ひぬきうち羽振はぶく鷹いさぎよし西北にしきたの晴

引佐細江

奥の瀬の引佐細江の冬水照り船入り進む音はじきつつ

波切といふところにて

ほの寒き鹹と淡水の落合は蛤の渚もあはれなるべし

浜名の湖

遠つあふみ浜名のみ湖冬ちかし真鴨翔れり北の昏きに

冬いまに居つく秋沙鴨か波切の渚の渦に数寄る見れば

冬の湖に見てゆく鴨の沖べにはつぶつぶとひたり羽音すらなし

風や冬とよみ飛び立つ 大^{おほ}族^{やから} 総立^{そうだ}つ 鴨の羽ばたき凄し

すれすれに波の面翔^{もかけ}るひと列^{つら}はすべて首伸べぬ羽ばたく青鴨

羽ばたき頻りにして鎮^{しづ}もらぬかなや立つ波を北^かへ翔^{かけ}る鴨南^くへ来る鴨

乱り立つ鴨の羽音の高処^{たかど}にはすでに幾羽か小さく飛ぶ影

本興寺林泉

鷺津の本興寺は法華宗の古刹にして、その林泉の幽寂なる、譬ふべきなし。池にのぞみて、懸樋あり。

所望されて、一首

水の音ただにひとつぞきこえけるそのほかは何も申すことなし

林泉を、また

水の音聴きつつをればこの林泉に満つるこほろぎの声もしづけき

蓮の葉の水に影おとすうしろには低き土橋ありて樽の橋桁

このごとき閑けき林泉の日あたりはただに眺めて坐りてをあらむ

物寂びてなにか豊けきこの林泉よく聴きてあれば朝はしづけさ

朝曇うち対ふ山の後空も眼にしたしかり鴨の飛ぶ影

本興寺の庭はこれかとさもこそと観てを居りけり十月末なり

続本興寺林泉

山内

高野槇たか喬なく竝なみ立つ冬の晴はれ君が御山にのぼり来にける（日瞻上人に）

夕ゆふ早くき庫裏くりのはひりは日たむろと築つ地いめぐらして朱あかき中ちゆうもん門

懸樋の音

水の音ただにひとつぞきこえけるふたび籠りみ冬にぞ聴く

水の音まさにひびけり聴きてゐて夕かげ近き冬のこの林し泉ま

池の面に落ちつつとほる水の音懸樋は冬のものにぞありける

樋より池に落つる清水の音にしてひとところただにうち凹めつつ

林泉矚目

さむぎむと石に映るはみ冬づく水の影ならむ観つつ幽けき

刈りこみて段おもしろき細葉槿ふゆの日ざしのあたるともなし

群葉張る蘇鉄のそよぎ今見ればひたとしづもり寒き日のいろ

鳥の羽の冬毛の雲ひとながれみづうみの方は空ぞ晴れたる

山茶花のはつかにのこる梢のいろ面冷えながら檜葉と親しき

土の橋かかり低きに糸檜葉いとひばのほそぼそと垂れてみ冬ありける

糸檜葉の垂り枝見れば汀みぎはにも夕光ゆふかげおよび暮れがたみあり

いづく洩る冬の日ざしぞ赤松のそこばくの幹いとど明れり

風さむく椎の葉さわぐ林泉しまの山や松の木立はこぼれ日のして

客殿の角型すみがた屋根にさすあかりつくづくとあふぐ西も寒かり

短日みじかびの寒きこずゑの後のちあかり鳶とんびくだり来羽根く撓たをりつつ

俗に文晁寺といふこの寺には、文晁の四季の大壁画あり。就中春の絵ことにめ

でたし。

春の山しづもる見ればおほどかにほひこもらひ墨の画ゑの山

橋への上を友がり恋ふる人のかげ雪しろきゆゑに墨画おもしろ
(冬)

余響

玉葉坊を俗に坂寺といふ

坂寺の高垣見れば槓垣に山茶花まじりいつくしき靄

文晁寺でらまかで来つつも犬の仔この戯むる見ればこれも冬の画ゑ

常靈山本興寺より湖水に向ふひとすぢ道唐辛子赤く掛け干しにける

近藤医院の横を過ぎて後に消息す、一首

槇垣にまじりて赤き南天の二えだ三えだ目にしまつりぬ

岸寄りに湖も暮るるか太郎鴨の首さし向けて浮くあはれなり

きこきこと湖沿まがるひとくるま唐辛子積み赤きその束

雪虫の飛びつつ曇る水の空雪にかもならむけだし幽けさ

白須賀

遠州浜名郡白須賀

白須賀は昔の宿、

ただ白し、ものさびて、

その薮しとみ、はひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、軒竝のきなみの

同じ型、

出て、はひる人すらや、

同じ影。

音も無し、なにひとつ、
埃づくものもなし。

草屋のみ、

弱き日のあたりたる。

いづこぞ遠江灘、

灘見坂ほどこかくて、

薄ら曇る低き空を

風も来ず。

冬ながら、その屯たむろ、

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしくも、

おもほえず、寒しとも、

白須賀は旧街道、

朱の鶏冠とさかふりたてて

軍鶏しやもは居れども、

そは暮のひとあかりのみ。

とほつあふみ浜名の郡日こほりはぬくし坊瀬越え来てここは白須賀

おなじ冬おなじ薮しとみの日のあたり白須賀はよし古りし白須賀

ここ過ぎてなにか現うつつのけほどさよ物はたく音も立ちて止やみたる

富士五湖

昭和七年、妻子と共に晩秋の富士五湖に遊ぶ。

富士五湖

山中湖

よく響く冬は暁ふる雨のただにひとついろ一色の音ぞ立ちたる

うち黄ばむ落葉松見れば狭霧立ち氷雨ひさめひびかふ時いたりけり

山中湖あかつき近し落葉松や目もさむざむと向ふ雨霧あまぎり

針はり縦もみに氷雨ひさめうちひびきいさぎよしことごとの雨よすがしとを見む

暁あけの雨冷えとほる玉の野葡萄えびづるのふたいろの玉は瑠璃よ紫

落葉松からまつもしみみ黄葉もみでぬ木きの立たちのまこと直すぐなる織ほそき葉の神

冬向しむふ繁からまつみ落葉松氷雨ひさめふりいたもにじめり寒からまつき落葉松

河口湖

鵜の島は紅葉しにける岩はなに兎出てゐてぬくとき秋や

鵜の島と舟子かこが呼ぶなる湖うみの島兎跳ねつつ鵜の鳥はゐず

湖うみの島い照る紅葉に遊べるは耳後あとへ垂れて番つがひ野兎

S

秋の晴湖面こめんにあそぶ紋白蝶もんしろの影ひとつ見つつぽんぽん舟行く

西湖

西湖の熔岩壁を立つ鳥の羽ばたきを聴けば間隔正し

み冬づく西湖の鱸すずきよく冷えて釣られたりけり徹とほる氣き先に

西湖はしづかなる湖瓦うみ焼く煙けむりのぼりゐて秋の色あり

精進湖

パノラマ台にのぼりて

尻高に子が乗る後あとをその母と馬はすすめつよき紅葉なり

ここよりぞ富士は裾野の見わたしと水照しづけき四つの湖見ゆ

青木繁む富士の裾原風乱り行きはしる雲の絶ゆるまもなし

雪の富士秀に現はるる立ち待つと将た寒けかり繁き天雲

帰路湖畔にて

精進湖雲あし赤く日暮なり写真とらすと家族馬竝む

本栖湖

本栖湖は奇ふる湖、霧ふかく、水皺幽かに、青木立神さ
びせず、渚ゆく人かげも見ず、風ふけばひろごる面の、
影日向、黒くあかるく、をりをり映る。

同じく

パノラマ台より俯瞰す

本栖^{もとす}の湖^{うみ}かがよふ見れば水^み皺^{じわ}立ち霧ながれをり流るとなしに

本栖^{もとす}の湖^{うみ}雲^{ゆきぎ}去来^{きょらい}してみ冬なりこちごちに光るしろがねの面^{めん}

一色^{いしき}に幽^{かす}けかるなり時じくをみづうみの面^{めん}へ吹きおろす雲

雲の遠に南アルプスと思ふ雪かがやき列^{つらな}竝^{なら}み本栖湖暗し

み冬の雲もこごるか我が湖^{うみ}と木立神さび黒く隠^{こも}らふ

初夏北越行

昭和四年六月、新潟、今町、国上、出雲崎各地に遊ぶ。吟懷三十四首。

初夏北越行

新潟

夏すでに砂丘の光おぎろなし弘法麦の筆の穂のいろ

砂山の茱萸ぐみの藪原夏まけて花了りけり真砂積まさごむ花

海荒く砂丘のい照り涯はてし無し燈台が見ゆ赤き燈台

港には装よそひましろき船いくつ夏はさやかに雲流れ見ゆ

松原、日光療院裏にて

数珠茅じゆずがやに夕づく日ざしやは柔らなり穂のまだ伸びぬ青き数珠茅

北越沿線

挙こぞり出づるこの国原の田植どき植うるかぎりが田にとよみつ

挙こぞり出でて苗ひき植うる田植笠早やおもしろうなかぶしつ

日おもてのたも木に霧きらふ夏がすみ植うる田も見ゆ早苗田も見ゆ

山里は家の南の田並びを皆出て居らし植ゑそめにけり

今町郊外

弥彦いやひこの夏山霞ただならず国上くがみは末にうち低みつ

おほかたは田を植ゑな並なめぬ道の手にたもの若葉の照り交かふ見れば
赤々とこくれんぐわしの毛は垂れて田へ行く子らに朝そよぐなり

註、こくれんぐわしは唐もろこしの方言。

国上行

草繁き山いくつある小峽をかひとて蛙のこゑのよくひびきつつ

乙宮のおもての田居に鳴く蛙日光ひかげしづけき山片附けば

かへるでのき青をの明りにうつら来る植女うゑめがひとりまろき菅笠

山^{やま}方^{かた}は国^{くがみ}上^{かみ}へかかる道の端^はにぬきて竝^{なら}べぬ涼^{わさな}し早^{はや}稲^{いな}苗^め

植^うゑそめて山^{やま}田^での畔^{くろ}の昼^{ひる}餉^{くわ}どき童^{わらべ}らとよみ早^{はや}やあがり来る

あしびきの山^{やま}田^での田^で居^ゐに日^ひ竝^{なみ}下^おり隣^{りん}り植^うゑたり田^で竝^{なら}びの友^{とも}

あな清^{さや}け小^{せう}田^{でん}の山^{やま}田^では植^うゑなめて目^めにもみどりの風^{ふう}そよぐなり

ゆきかへり見^みつつましけむ国^{くに}つぶり揺^ゆりおもしろき田^でうゑ菅^{かん}笠^{かさ}

ありやとも求^{もと}め来て思^{おも}ふ道^{みち}の端^はに君^{きみ}が置^おきたる黒^{くろ}き鉢^{はち}の子^こ

五合庵の蹟にいたる

国^{くがみ}上^{やま}のぼりつつ来^きし杉^{すぎ}むらを松^{しょう}風^{ふう}の音^{おと}ぞ吹^ふきしづみたる

蔭山の夏の小峽をがひの桐の花咲きにけるかも群杉こまが木間

国上くがみの片山蔭の桐のはな遠く蛙の鳴くがしづけさ

まさしく閑しづけかりけり桐の花の咲きあかる上に松の音して

風そよぐ板屋いたやかへで楓の二三もとこの庵いほりも夏いたりけり

山かげの君がいほりの跡どころ楓かへであかれり青おをがへる蛙鳴き

早稲田わさだには雨けぶるらし真木山のこの見おろしも蛙鳴きつつ

出雲崎良寛堂

出雲崎は良寛堂の夕つかた網かいひろげ人かがみ居る^を

出雲崎夕浪明し我がひとり君がみ堂に詣でるにけり^{あか}

一色^{ひといろ}とうしろに蒼き夏の潮角の御堂はいつくしくして

この御堂夕かげながら詣で来て廂のつまの反りのすずしさ^そ

この御堂夕照りあかし穩しくはしづけさのかぎりたもちたらなむ^{おだ}

出雲崎この夕風のはるかには日かげ現しき佐渡ヶ嶋見ゆ^{うつ}

木會長良行

昭和二年八月、一子隆太郎を連れて木曾川、恵那峡、養老、長良川等に遊ぶ。

木曾長良行

犬山、白帝城

ちかぢかと城の狭間さまより見おろしてこずゑの合歡ねむのちりがたの花

閑しづかなる城とおもふをあはれなり日でりはげしく合歡ねむぞほめける

入母屋いりもやの萱いりもやににほふ合歡のはな犬山の城は白く久しき

鷹

蹴爪がなかに岩角がんかくをつかむ鷹一羽その下しもつ瀬さをぞ青に渦巻く

岩^{がん}角^{かく}に鷹^{くろ}鷂^{くろ}くるる夕焼がいつまでも見えてこの水早し

犬山より木曾川を下りて

合^ね歡^むの花移ろふ見れば夏川や河原のい照り時過ぎにけり

花火過ぎ水にただよふ^{わん}椀^{がら}殻は鳩の鳥よりなほあはれなり

水車^{ふね}船^{ふね}瀬々にもやひて搗く杵のしろくかそけき夏もいぬめり

笠松の四季の里にて

ふたいろの花さるすべりおほよそに月夜はしろしあかず遊ばむ

夏の夜は短き藤の実の^{さや}莢^{さや}のはつかに明けて風いでむとす

雀のお宿にて

松が根にそよぐ小萩のあはれさよ蒔しき竝なめ子ら昼寝ひるいせり

恵那峽

こごし巖いは恵那金剛に涌く雲の照りしづかにて久しかりけり

堰せきあまる水量みかさ梢をうちひたし空ちかづきぬ峽かひのふところ

朴ならむ岩石層に吹きあつる風ことごとく光葉てりはかへ翻せり

養老 菊水楼にて

もてなしと杉の木群こむらに篝焚き溪流の音に添へにたりけり

開あけはなちぬい寝るみ山の短夜は養老の滝の音しらみつ

長良

舟べりに羽ばたきあがる鶺鴒の鳥を篝照らしておもしろき夜や

腰簍かさをれに風折ゑぼし烏帽子綱さばく鶺鴒匠は夏のものにぞありける

我が物とさばく檜綱ひづなのはらはらに鶺鴒匠は鶺鴒をぞ浅夜あさよあつかふ

黒き鶺鴒は嘴黄なりそち向きに水切りて羽うつ火映り見れば

ほうほうと鶺鴒を追ふ声の末消えて月の入るさの惜しき横雲

下
卷

童子
群像

成城学園を思ふ歌

昭和八年四月、東都成城学園大いに紛擾す。その職員、父兄両派に分れ、抗争数月に及ぶ。教育界に於ける未曾有の不祥事なり。当時、隆太郎小学部六年に在り。篁子同じく二年に在り。即ち父兄たる故を以て、我が正しとする信念により行為す。抑 この学園たる沢柳政太郎博士総長たり。小原国芳氏その初より主として参劃経営するところなり。同博士死後、新総長小西重直博士の下に校長小原氏専らその経綸を尽す。この年初夏、総長の辞任と共に、つづいて校長を引責せしむ。その理由とするところまた故なきにあらざるべきも、小原氏に対するその道を失し、遂に教育の本義を誤る。我が立ちたる所以なり。録長歌四首短歌八十八首。

雑草に思ふ 序歌

荒地あれちぎく菊花咲きほこる道の端はた子を思ふ父の濃き影佇たちぬ

竹煮たけにくさ草粉こにしろくふくこの日でり堪ふべしや我かへりも省みなむとす

相憎ともがらむ輩がらがうへに思ひいたりしみじみとあり日の照る庭に

この原くさぶや草深かゆり百合の草ぶかに匂ひこもらひ昨きのはありにし
(沢柳先生を憶ひて)

成城学園また子ら行かず雑あらくさ草の花咲きほこり早ふつきや文月なり

小原校長送別会

四月某日、荒涼たる校長送別会なるもの開かる。父兄その理由を知らず。ただ一部の理事及び財団の刻薄に驚く。蓋し直感すること深し。挙り起ち遂に流会す。

ひと鉢の草の花だにすゑなくに昼冷まじく師を讎ふとす

追ひ讎ふ下心はさもあれやいふ言は皆うやうやし聞きのよろしさ

事はてむ憤らくも現なり父母よ見よこは正眼なり

母の館

母の館は児童の母たちの建設するものなり。感慨深し。

母の館窓^{くわん}は開けど照る月の来り坐らむ椅子ひとつ無し

母の館父兄会

父兄遂に立つ、四月三十日なり。

言^{こと}拳^こぐと胸ぞ迫りて泣きにける父と母の声はみな誠なり

空見つつ何の言葉ぞ手ぶりよく説きは巧めど胆^{きも}に響かず

（長田博士に）

小学部

五月十二日、小学部職員、父兄を招集し、その態度を声明す、一に結束固し。

一に成城教育の精神をうち建つるもの小学部なり我疑はず

上衣うはぎぬぎ汗みづくなれやかく歎きしかく言こと挙げ君ひたすらに
(内田訓導)

いふ言ことは拙けれどもひたおもて眼は輝けり下心したな哭けるなり
(斎田訓導)

我が子

子の太郎声はあげつつ帰りたり我が先生を正しと言ふなり

我が太郎まこと直すくなりや幼なくもただに師を見る眼はまじろがず

心よりその師よしとし疑はぬこのをさなさに父我泣かゆ

我が立つは

此の立つは私^{わたくし}ならず、人ひとり守^もるとにあらず、皇^{すめぐに}国をただに清むと、正しきにただに
反^{かへ}すと、心からいきどほる我はや。まさやけき言^{ことだて}立^たか彼^かは、ゆるすべき邪^{よこしま}か其^そは、己^{おの}が
子のためとは言はじ、すべて世の子らをあはれと、胸張り裂くる。

反歌

この道よただにとほれりこごしくも敢てい行くに何かはばまむ

正しきを

正しきを正しとせずば、照る日さへ子ら疑はむ。まさやけき明^{あか}しとせずば、かぎりなく澄
む月にすら、闇かとも子らはまどはむ、安寝^{やすみ}しなさね。

母の館父兄大会

五月十四日、母の館に再び父兄大会を開かむとす。事前三沢校長の命により、その扉に釘うつ。後漸く開会す。小原前校長来り初めて辞職事情を釈明す。

声絶えて道に言はずも父母の子を思ふ誠ただにとほらむ

人の子は棄てて清くば道芝の塵だにも如かず風の埃に

多摩川にさらす調布たづくりさらさらに何ぞさらりと棄てて去りにし

この子らぞ父よ還れかへと祈るなる還り来ませや何も言はずて

この子ら

その後、紛糾、遂に休校令下さる。而も学生は皆登校し、自学自習すること常のごとし。

この子らを見つつ歩^{ある}けば地は灼^やけていや日は暑し影がしるしも

この子らがボールかつとばす音さへやま空にひびき痛^{いた}々^{いた}し我は

ほがらかに子らはあるべし畏^{おそれ}無く心揺り遊び常すこやかに

きびしく今は鍛へむ事しあるかかる日にこそ光るべきなれ

女学生自学、自ら出て体操す。

馬鈴薯のうす紫の花ゆゑにわづかに堪へて子らは足踏む

反動の教員たちに

何ぞ、暴動もせざる子弟をば師を脅迫せりと誣ふる。

日のもとに父打つおのが子らありと悲しみてよき空もあるらし

道は説け言は繁くもしかれども生^{いき}の命に触るる無くば如何に

眞実を觀よ

事はただに単純なり、学園のこの空を見よ。

雲^{くも}しろくいゆきわたらふ夏の空松^{まつ}蟬^{ぜみ}の声ぞここにしづけき

誠あらば神も哭^なくべしこの声やしづかにはあれど父の声なり

この子らは共に遊ぶ遊ぶ無しその母と母の何憎みする

六月三日

長き休校の後、この日連袂辞職したる三沢校長初め三十数名の高等及び中学部の職員たち乗り込み来る。前警視総監長岡隆一郎氏校長室にありて何事かを指揮したるものの如し。私服正服の警官四十数名監視、反小原派の帝大教授、その夫人、竝に父兄等活躍す。あはれ学園も未なるかの如く感ぜらる。かくひたざまに自由教育を善からずとするこの圧迫は如何。

何すとかここにわが来しこの父は子を思ふゆゑに寄るべなく来し

手を面^{かほ}に涙もろなるこの爺^{をぢ}さ父なるならしとみに老いにけり
(奥田老)

夏旱^{ひでり}子を思ふ母の戸に立つと寄り寄りにゐて泣きもあへなくに

子の母ぞ照る日明^{あか}きにかくばかり行きもまどひぬ面^{おも}ほそりして

子の母の今のなげきは道芝の照る日に萎^なえて地^ちしばりの花

ある日の朝礼

三沢校長脱帽せず、而も国家合唱の半に、中止を命じ、タクトを揮へる指揮者
杉先生を壇上より突き飛ばす。「非国民」の声起る。合唱なほ肅々たり。

国の歌君が代歌ふしづかなるこのひとときは譬ふるものなし

三沢校長辞職

よしなき言立^{ことだて}やげに退^ひくにさへ何か一言^{ひとこと}は言はねばすまず

潔き人は退^ひくべし棄てざまに吐き棄つる言^{こと}は蓋^{とほ}し徹らず

三会堂にて

最後の父兄大会なり。

ひたおもて君が直^{すぐ}なる言^{こと}挙^{あげ}は聴^きいさぎよし心に徹^{とほ}る
 (加納子爵)

涙共に下るこの声この子らぞ愛^{かな}しとは思^もへ亦聴き難し
 (学生委員)

ある夜の父兄実行委員会

経過深憂に堪へず、奔命に疲る。

我^{われ}に無し日はも夜も無し心ぐくただに思ふは子らが額^{ぬか}髪^{がみ}

事しありて君とこそ行け我どちは音清^{さや}々^{さや}し響かひ行かむ
 (加藤武雄氏に)

夜のほども疲れ歸りて力無し山^{やま}方^{かた}早く蟬の啼くもよ

夜の田には蛙ころろぐ聴けよ聴けよあはれなるものは声ころろぎぬ

師を売る者

小原氏遂に告訴さる。その告訴の主は某氏なれど、その策謀の何れにあるかは歴然たり。

日は照るを將た安からし師と頼む市に引き出て早や放り^{はふ}売る

夏早やも棘に花さく霸王^{さばてん}樹の琉球びともすべなかるらし
(某々両先生に二首)

国びとは心直なり^{すぐ}梧桐^{あをぎり}の青一色に表裏^{おもてうら}も無し

その子らはかくも歎くを石うつと師父ちちなる人を將いまた縛しめぬ

この憤りを、四首

焼き鉄がねよはやるひづめに蹄鉄かうつと己しくるぶしが踝ふしも火もて焼きそね

眼なまの白き生の鰯すは簀なに竝ひめて日乾ほしあまぼし串に刺せちふ

鈎かぎ爪つめの脊骨曲りが鈎かぎ形なりに歩ありきはらばひ石の下掘る

陰かげふかき醜しこの土竜もぐらが土つちやぐらたたきうちこぼち日に曝さらすべし

職員某々氏も亦他の職員を訴ふ。

朝なさな机ならべてありけらし今そし譏り合ひて子ら教へをり

告訴せられたる榎本、福上、小野三氏謹慎を命ぜらる。

何頼め降らす石かも草ごもり家居る際は香きはすらえ立てず

風に立つ

心弱き職員たちに

腰弱のへろへろ、正しきを何なづむ。骨無しのとろとろ、立つべきを何呆ほけつる。深山みやまの
一木ひときかし榧の、風に立つ樹思へや。

反歌

男子をのこなれふぐり締めこそひよろ腰のへなへな臀おしきむしろうつべし

照る日に

悪しきは沙汰過ぎたり。悪しきを見過ぐすもの善^よからじ。弱きもの詮無し。照る日に、この明^{あか}きに、何怖^おづる、人びと。五月^{さつき}の、白雲のいゆきしづけ松むら、その姿思へや。

反歌

清明^{さやけ}かるけだし稀なり自^しがためと草のいきれを汗^{あせ}して歩^{ある}けり

女学部に対する圧迫いよいよ加はる

清^{すず}しかもその新^{わかづき}月の眉あげて敢然と立つ少女ら見れば

藤棚の藤の葉とほる日のひかりつくづくと土^{つち}に見つつあらむか

少女らははげし日中も舎居らず池のべ求めて秘読みにけり

朝なさな清にのぼりし足音の早やたどたどし泣きて行くかに

或る母たちに

賢しくもをみななりけり言ふことは早や愛しけど己が子をのみ

言立ててつぶさにはあれ女子や背戸の春日に牛売り損ふ

よき母は清くありこそ照る月の子を抱きつつ草に立つかに

口あくるもの

朝夕しきりに文書にて誹謗する者あり、煩堪へがたし。

あなうるさ草につくばふ下闇の蚊喰がへるが咽喉鬼灯のんどほほつき

狐狸

横議の士続出し、新聞利用またしきりなり。

日のまぎれ我は直行く野の道を横さ走りて鼬目翳すすぐゆ
いたまかげ

ま日照りを夜の陰草にたぶらかす狐のやからは犬に噛ましめかげぐさ
きつ
か

小原国芳氏におくる歌

物言ひて清けかるべし天つ日に事あらはなり隠すよしなしさや

身ひとつにただに命をこめにける自^しが学園は他^{ひと}のものは

夢なりや縦^よしやかなしき我が業^{わざ}と君樂しみき悔いむ何無し

事すべて私ならず道直^{ただ}に公ありて徹^{とほ}り行くべし

世に憂ふ人が言^{こと}挙^あまつぶさに言ふことはよし多く私

悪しとなす言^{こと}の僻^{ひが}事^{こと}しからずば神にありなむを人なりき君も

再び

憂ふ無き君たはやすし事々につくづくと思^もへばよく投げにけり

大味も程にこそよれ幾塩と薩摩の鰯^{ぶり}よ塩つよく沁め

君^{めぐ}繞る人も実^{さね}なし必ずも言ふらくただに下心^{した}に思はず

時により教へ賜^たぶなり世に憎み荒ぶる言^{こと}も聴きて畏こさ

感深し

師、子弟、父兄、これこの学園の三位一体となすものなり。

三つの円この触れ合の全^{また}けくもしかもほのぼのとよかりけるもの

昭和七年三月、女学校卒業式直後、小西、小原、銅直、金子諸先生同乗の自動車、電車と衝突し、転覆す。今に於て感深し。

困^{もと}し無き災いはなしこの道や心そろはざれば皆くつがへる

既に遅る

挙り立つなほし遅^{おく}れき何をしかい行きたためらふおぞの父母

還るなき人を待つよは落鮎や多摩の瀬合に朝釣^{あした}るべし

諸人よかもかくもなし香^かにこもる草深小百合省みななむ

児玉新総長に、一首

静かに観君はますべし善き悪しき後^{のち}つづきなりその秋俟^{ときま}たむ

人々よ、真に思へ

草原に蒼くいただく天^{あま}つ空げに事も無し大きむなしさ

天地とむなしかるべし身ひとつに何物も無ししかく生きなむ

思ひしみつくづくとはありけらし朝起きてそよぐ草の葉を見よ

恩讐を越えて

夜ふかく今に思へば善き悪しきすべて遥かなり額^{ぬか}垂るる我は

童形

秋夜童女像

月あかしひと日吹き去りし風速のとどろなりしか今は氣けもなし

女めの童わらはあかき石榴ざくろを掌てに置きてゐやまひ正し九九をこそよめ

髪いらふ童どう女にが笑顔かぐろくも艶えんだちにけり父をうち見つ

額ぬか髪がみのかなし女め童わらはうつら読みまふ睨た垂たりをり燈ひをあかく置き

女めの童わらは肩はに頬をあてうつら振る垂たり髪がみ黒し肩にしばしば

ねむからばまこと寝よとしかきおこし燈あきは明めけし女め童わを母は

硝子戸の燈ひうつり映見ればスエタアぬぐ紅どうるの童女ねむげ眠気なりけり

秋夕

ひたすらよ　これの女め童わ、文字書くと　習ふと書きぬ。その鳥の　鳥によく似ず、その
魚の　魚とも見えね、あなあはれ　鳥や魚や、巧まらずも　なにか動きぬ、その影かげ象さう。

反歌

このゆふべ空やはらかし物の葉にさだかにはあらぬ狭霧なづさひ

制帽

中学生、我が子の太郎、道ゆくと、読むと、坐ると、箸とると、帽かむりゐる。制帽よ制服よただに、金釦しかとはめゐる。うれしきか小学卒へし、中学やしこほこらしき。蘇枋咲くと、樗^{あふち}そよぐと、霜置くとあはれ、一学期二学期よとあはれ、日の照ると、雨ふると、風ふくと、寝^ぬると起きると、制帽かむる。

反歌

はつ霜とけさは霜置く門の田に晩稻^{おくて}の黄ばみ見つつ子は居り

風騷
四部
唱

薤露

沼津薤露行

若山牧水の七週年に際し、哀傷の新たなる、遂にこの追懷吟一聯を成さしむ。

一、その庭

水の音常は幽^{かす}けき庭ながら人入り乱りたづきあらなくに

まとに見て松が枝^{くろ}黝き日のさかりしばらくは聴かず蟬の声すら

やり水のちろろとくぐる篠の根も眼には光れど心には覩ず

二、瓢と仏

うち見には瓢枕ひさしに仮寝してただにとろほると人ぞ坐ましたる

この仏いまだ酔ひ臥し安らなりおのづからいつか起き出でまसानも

うたた寝ゆ或あるは目ざめてたはたほと振らす瓢か酒をこほしみ

三、その人

胸を張りて朗らなりける歌ごゑの君なりしかも塵もとどめず

よく遊び常に愛めでにし山水ときやけかりしかとどこほる無く

四、火葬場へ

狩野の川瀬にすむ鮎の若鮎の今かき走りにほふその子ら

霊柩車火にほろびたる街ぬけてひたに香貫の道駛^{はし}りつつ

かきおろす柩^{ひつぎ}にうごく日のひかり夾竹桃は今ぞくれなゐ

五、伊豆大仁穂積忠宅に宿る、義弟山本鼎と伴なり

油もてすべなゑがくか芋の葉を露のまろびて落つるその玉

すべはなし風にかがやく芋の葉をゑがく油絵われは観てをり

六、三津の浜にて

群れつつを生簀いけすの鰯子しこの片寄りにそろひさ走りめぐりやまぬかも

船にして網くりたたむ子らがこゑ夕焼の頃はとみに勢はやりぬ

三津みつの浜ゆふさりつかた出でありくと絵を描かく友の傍そばに寄りゆく

茅ヶ崎南湖院

昭和九年四月十八日、大手拓次君病歿、妻と行きて告別す。

南湖院潮騒しほざめひくし春もやや闌ふけにつつありて人は果てたり

臨終^{いまは}まで我をたのめと沙汰せよと待ちまけし君をひとり死なしぬ

死顔の神さぶ見れば灯^ひをつけて揺るるコードの影か隈だつ

電気火葬

仏は義妹富子の母刀自、落合火葬場にて。昭和九年晩春。

1

継ぎおこる電気火葬の火のとどろ聴きつつすべな舍利ひろひ分く

この仏えにし深からずつつましく舍利は挟みて春雨間^{あまま}なり

この骨片^{こつぺん}息づく見れば下^{あか}紅く仏はいまだ燃えていませり

目にとめてうち白^{しら}みゆく骨^{こつ}の火氣^{ほけ}箸につきあはせ拾ひつつあはれ

さらさらと骨粉をあけ夕さむし隠^{おん}亡^{ぼう}はよにも手馴れたりけり

2

迎ひ立つ軍帽ひとつまぶかなり何か立ち待つその焼がまを

火に葬^{はふ}る今を盛^{さか}りの音聴けばおほかたは早やもほろびたるらし

電気火葬の重油の炎音立てて猛^{たけ}るたちまちを事は果てたり

3

手を洗ひつくづくと見る向う雨山の桜しろく咲きたる

若き誰彼

しみじみと堪へてゐれども身のほとり数死にけり若きともがら

かなべてあはれよと思ふ春かけて幾いくたり人か死にし我が眼さらずも

若わかうど人は身をいたはらずほとほとに疲れつつ来しつひに死にせり

風懷

冬夜醉歌

昭和七年の冬のことなり。深夜、池上町なる斎藤瀏將軍を驚かし、遂に曉にいたる。

ことさら我名^{なの}告らずも夜のふけてとどと叩くは酒の神と知れ

この夜寒^{よさむ}とどと襲へば戸はあけて眼をこすりをらす我なり將軍

夜風の旋風^{つむじ}なし入るおぞや我酒出させ早やとうちころびぬる

冬の夜もとよまず酒の友どちはおろかしくしてかなしなかなか

蠅をどりなるものを仕りて

冬向ふ蠅の日向の舌ねぶりあはれ手ぶりにまね申すなり

五十九議會

五十九議會大に紛擾し、窓硝子を破り、遂に流血の醜状を曝らす。

一茎の草の葉にすらひざまづく心は思へ彼等知るなし

朝雲の大き御氣色かすかだに仰ぎまつらばただに涙ならむ

今朝やぶる硝子のひびき寒きびし畏き方にきこえずあらなむ

血を流し汝等あるべし音のみかその頭割りよき醜の鉢金

陣笠と電燈の笠と何そちがふ凍みつくはただに冬の蠅のみ

歌人の或る向に

言さへぐ何の楽しみ争ひて声音高きが多く怖ぢつつ

闇怖づる弱き奴が空声を毛の荒ものの如くふるまふ

よそ事ながら

女弟子もつものにあらずしみじみとかく思ふゆゑに身を退く我は

師をうやまひ弟子をかなしむ 遮さもあらばあれほか 莫なんによ 外ならぬかもよ男女てふもの

短歌朗吟

ほのぼのと歌ひあげゆく声きけば暢のびうらがなしうつくしき揺り

現うつしくも恍ほれたる春のゆふなげきおのれ揺りあぐる声の羨ともしさ

よく歌ふ春もあらねば我やはた歎なげきわぶなり声の揺り聴き

歌ふとし声に巧まば流るべし物のかなしき心知りてな

うちあげて朗らなりける我が友の牧水のこゑの今もおもほゆ

歌ふこゑ澄みぬる際^{きは}よすべからく梁^{うつはり}に塵もとどめざるべし

春宵

春宵東金囃子

中^{なか}空^{ぞら}に紫あかる月夜雲九十九里の浜の春のしづかさ

月や春、北^{きた}之^の幸^{かう}谷^やの村^{むら}方^{かた}を舞ふ獅子舞の笛もこそ行け

ひたしやぎり月に吹く子が横笛は口もて吹かず腰ゆすり吹く

口あけてくわんと鳴らした頭^づのひねり獅子はおもしろ家^やに躍り入る

東^{とう}金^{がね}の茂右衛門どのといふ謡^{うた}は春の朧のものなりけらし

月夜暮春調

水ぐるま春の月夜の野^{のだひら}平に音立ててをり遠かすむ森

夏向ふこの夜すがらに月は照り水車しづかや米を搗く音

月夜立つる水車の音は夜ごもりとかすむ草田の低みより立つ

嶋田旭彦病篤しといふ

音ひびく春のおぼろを人すでに意識すら無しと月の曇りを

月おぼろ草田の堤歩み来て今は聴きをり墓を蛙を

夏すでに月の堰^{みぜき}の遠^{をちこち}近に蛙啼きつつ水幅^{みはば}明るむ

マチ擦^すりて子らとうかがふ砂利道に杉菜のみなる露のこまかさ

風そよぐ蓬のうれ葉裏見せてしろき月夜を田へ下^おりるなり

KONZERT

或る夜の音楽会

大きチエロ立ち擁^{かか}へつつ夜は明^{あか}し押しあてて弓^{きゆう}のいまだしづけき

立ちかかへ脊丈をあまるチエロの棹^{しんじん}新人はかなし指にそだたく

四人^{よたり}立ち揺り弾くチエロの四つの胴張り厚うして響き合ひにけり

立ちかまへ擁^{かか}ふるチエロは黄褐の女体なり弓^{きゆう}のかいなづる胸

チエロの胸ひたかきむしり平^{たひら}なり揺り曳きにけり灯^ひに光る弓^{きゆう}

チヤイコフスキー交響曲第六短調「悲愴」なり香蘭のことをいつか思^もひゐき

永日

永日

臺^{たう}に立ち葉牡丹の花のどかなりうつら飛びめぐる虻と蜂と蝶

葉牡丹は臺立ちほけて日が永し花さきにけりちらら黄の花

康徳皇帝を迎へ奉る

国を挙げて声はとよめどしづかなり神と聖^{ひじり}のみ手とらす時

日のもとに我が大君とみそなはし春のあしたの山ざくら花

軍刀の歌

陸軍の依嘱により大陸軍の歌成る。恰も日露役三十年記念に際し、昭和十年三月十四日附、軍刀の贈を受く、靖光の新刀なり。その歌に曰く、

大陸軍の歌

1

青雲あをぐもの上に古く、

仰げ皇祖、

天皇の大陸軍、

道あり、統べていつ一なり、

建国の理想ここに、
万世、

堂々の歩武を進む、
精鋭、我等、
我等奮へり。

2

盤石と誓堅く、
ばんじやく ちかひ

守れ軍紀、

天皇の大陸軍、

勅あり、律は儼たり、
ちよく

奉公の誠常に、

一心、

烈々の士気は徹る、
とほ

身命などか、
などか惜まむ。

3

旭きよくじつ 日のぼるごとく、
揚げよ国威、

天皇の大陸軍、
風あり、軍旗燦たり、
大陸の血河すでに、
征戦、

赫々の誉高し、
忠勇曾つて、
曾つて範あり。

六合^{りくがふ}を家と広く、

布^しけよ平和、

天皇の大陸軍、

道あり、東亜我あり、

国防の一線ここに、

満蒙、

生^{せい}生^{せい}の秋^{とき}ぞいたる、

決然、敢て、

敢て当らむ。

大君^{おほきみ}の大御軍^{おほみいくさ}の行くごとく日はさしのぼり茜旗雲

この賜^{たま}ぶは陣太刀づくり靖光^{やすみつ}の鍛へに鍛へ魂こめし太刀

我が歌をよしと嘉^{よみ}してたまひたる陸軍大将の太刀ぞこの太刀

白絹^{しらぎぬ}の袋紐とき柄^{つか}がしらさしいづる見れば黄金づくりの太刀

この太刀の柄^{つか}の猿手^{さるで}に結び垂らしあなゆゆしかも朱^{あけ}の緒の揺^ゆり

柄鞆^{つかぎや}の黄金の桜^み三つ明^{あか}り大将刀ぞ褐^{かち}の糸巻

心澄みて抜き放つ太刀春浅し眼^{きつさき}は※にそそぎゐにけり

よく反^そりてにほふ焼刃のこの氣^{きさき}先新刀は清し冴えに冴えたり

丈夫^{ますらを}やなにか歎かむ皇^{すめぐに}国の軍^{いくさ}ならずも歌をもて我は

大將刀父のみ前にとり捧げ言ふことはなし今日はをさなさ

隆太郎に

此の太刀は皇^{すめぐに}国の太刀胆^{きも}むすびうちにうちし太刀ぞ心して守^もれ

神ながら清く明らけきひた心りゆうりゆうと振る太刀に子ら見よ

あさみどり満^{どうだん}天星の芽の日に映えて新刀はよし一^{ひと}ふり二^{ふた}ふり

うち粉叩き叩きつつるつ此の太刀の清^{きよ}の明りぞ花と照り合ふ

或る人に

大將刀抜き放ち瞻^{まも}る我が笑顔写真ニユースに見しといふかや

洩れ承りて

日の真昼我が大君はきこしめし今いさぎよし大陸軍の歌

卷末記

昭和十四年十一月十三日、寒波しきりに到つて、私の眼底は痛む。立冬既に過ぎて、私の薄明の視野には、やうやうに我が頼む光と影とが消えつつある。私は今、口述しつつ、この卷末記を妻に書き綴らせてゐる。

心貧しくしてかの春の日の夢殿を思ひ、その高貴と知性とに本来の郷愁を感じるこの私は、抑々何であらうか。

童女の朱衣がいまだにこの網膜に映像するのに、私の短日は微かに遠い。

曾つての夏、雲海の上に出でて、飛翔し飛翔した私は、かへつて郷土のまことに触れた。あながち歌に遊ぶとはいはない。かの夢殿の霞にやんごとなき籠りを籠りとせられた終ひ日ねもすの春を慕ふものである。少くとも私の道に於て私は楽しんでゐる。

齡知命を踰えて、いつまで稚い私であらうか。

§

『夢殿』は、前集『白南風』の姉妹歌集である。即ち『白南風』が、大正十五年暮春、小田原より東京谷中天王寺墓畔に転住して以来、馬込緑ヶ丘、世田ヶ谷若林、砧村大蔵、等に亘る東京生活の所産であるに對し、本集は、殆同時代の羈旅の旅を主として採録した。尚、羈旅以外の人事生活篇「童子群像」「風騷四部唱」等は彼の集の「砧村雑唱」の続篇たるべきもの故是に附加した。姉妹集たる所以はここにあるのであるが、ただ年代に於てその直後、雑誌『多磨』の創刊に到る迄の、略一年間の延長がある。

尤も羈旅歌としてはなほ『白南風』と『多磨』の期間に「白良」以外「伊豆の初夏」、「音・光・風」、「雪冠」、「溪流唱」、「水戸唱」、「河童早春賦」等の創作があつたが、これらは編輯の都合上次の集に譲ることにした。

さてこの『夢殿』は主たる羈旅歌を上巻とし、副たる人事生活篇を下巻とした。

本集の内容は左の如くである。

白良	長歌 一	短歌 一七	富士五湖	長歌 一	短歌 二四
郷土飛翔吟	一七	二五三	初夏北越行		三四
郷土と雲海	四	九五	木曾長良行		二一
羈旅小品	一	四八	童子群像	六	九七
満蒙風物唱		二一一	風騷四部唱		九〇
夢殿		四二	卷末に		一
浜名の鴨		四九			

計 長歌 三〇 短歌 九八二 総計 一〇一二

『白南風』に於て、その生活年代と、製作年月が必しも同一でない如く、本集に於てもそれらの相違がある。而もいづれも生活に準じて、編纂せられた。つまり『白南風』時代である。従つて本集は昭和二年八月より昭和十年三月に到る期間の羈旅及び身边生活に資材を得たものであるが、その製作は昭和二年より同十四年七月に到つてゐる。

また『白南風』がその編纂に志して以来新に感興の昂騰に乗じて殆その半に達する補作を得たるが如く、本集も亦「郷土飛翔吟」、「郷土と雲海」、「満蒙風物唱」等の大連作を初めとして、「羈旅小品」「夢殿」「木曾長良行」の諸篇に亘り、凡そ六百余首の新作

を追加するに到つた。この最近六月より七月上旬へかけての日夜行に因るものである。その他旧作に於ても、削除すべきは割愛し、抄録の分も更に改訂を敢てした。又新作の分もその後の推敲に於て聊か面目を改めたかと思ふ。

茲に煩を避けて一一に是等に就き解説をしないが、白秋年纂『全貌』その他今後の私抄について彼我对照して戴ければ幸甚である。

前述の如く、この『夢殿』は『白南風』の姉妹歌集である。これらは楯の両面の如きものであつて、いづれもが私のものであり、同時代のものである。かの『白南風』を通じて私の歌風に変化がないことを速断した向きは、この『夢殿』と綜合して改めて見直して欲しいと思ふ。歌風に変化がなかつたのでは無く『白南風』の編纂の法が、かくあらしめたのである。

『白南風』と『夢殿』、一は静であり一は動である。或は觀照に、或は叙情に、その時々

に於て私は常に自由に自らの変化を変化としてゐる。

ただ本集を読んでくださる方に願ふことは、これらの一首一首につきぢかに触れて専ら

に味つてほしいのである。而してまた一首を中にした四方の空間をも楽しんで欲しいことである。また作者の丹精そのものを読者その人のものとして、その鑑賞にその時を割いて欲しいのである。

本集の編纂がその年代に五年も遅れたことは、雑誌『多磨』の創刊と共にひたすらに前進を続け、過去を顧る余裕も無かつた為であつた。既にその後作歌も千三百首に上つてゐる。これらは眼疾の前後に別つて、いづれ二冊として順次に刊行する予定である。

編纂方法に就ては、上巻の羈旅歌は略倒叙の形態をとり、下巻に於てはその内容について分類し、その篇毎に年月の順を概ね正しくした。

全体を通じて最も旧き作は、「木曾長良行」の犬山城や、水車船、四季の里等の景情であり、最も新らしきものは、「飛翔吟」の雲海の一連である。歌風について云へば、眼疾以後の今日のものの多くが前時代のものとは交錯してゐる。

終りにこの歌集『夢殿』は、往年の『雀の卵』編纂の当時私と苦楽を共にした鎌田敬止君が、この度八雲書林を創立するに当り、その需めに悦んで応じた。そしてまた大に柔らかに悩まされたが、それにしても私の度を超えた推敲の習癖はまた其人に煩瑣と困惑とを

与へたに違ひ無かつた。

巻頭の朱衣の童女像は、永瀬義郎君の筆であつて私の永く愛蔵するものである。その童女の面貌が私の簋子に似通つてゐる節もあり、その簋子をまた人人が呼んで夢殿となしたことから、この歌集はこのやうなものとなつた。

狭霧立つ櫨はじの木群こむらの深みどり我が水上みなかみはわけて哀かなしき

青空文庫情報

底本：「白秋全集 10」岩波書店

1986（昭和61）年4月7日発行

底本の親本：「夢殿」八雲書林

1939（昭和14）年11月28日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

入力：岡村和彦

校正：光森裕樹

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢殿

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>